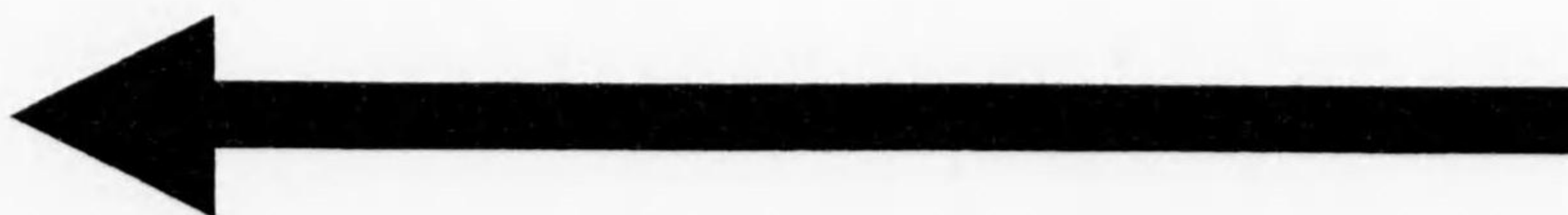


550

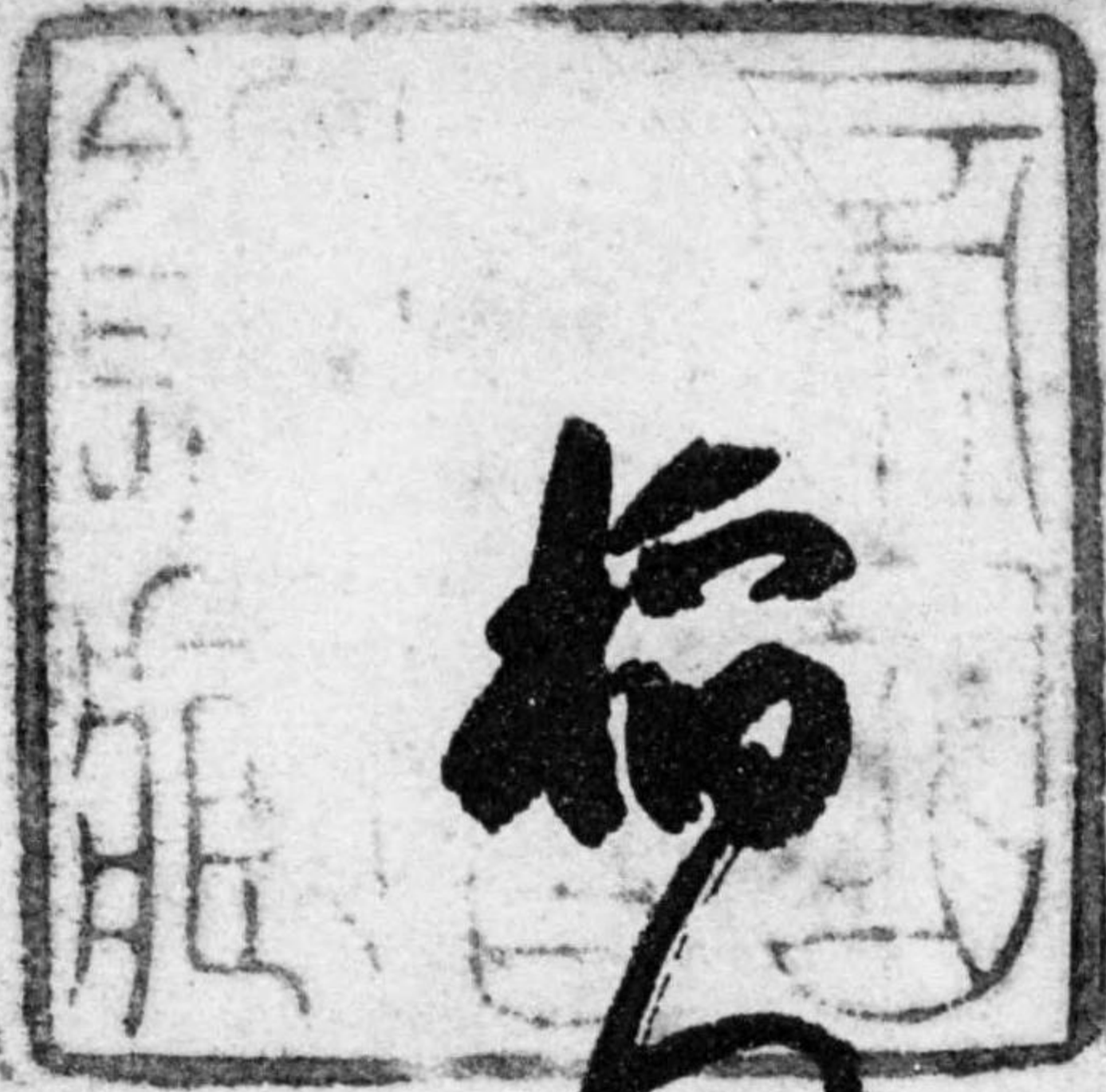
57



始



27.12 18



福

田

一

心

正

15.11.29

購求

稻田一作

草より出でて草に入る月が軒より出でて軒に入るといふ、江戸と武藏野の今昔も古臭し、今は全都に紙一枚の隙間もない百萬の人家稠密、ぎツしりと押し詰りて、およそ中流以上の生活にあらざれば家に庭樹のある筈なく、わづかの明り窓より首を突き出して、屋根の上の植木鉢に青葉を見るのみ、空に聳えて林立せる工場の煙突より吹き下す煤煙と、日夜間断なき四通八達の車馬より吹き揚ぐる塵埃と相合して、濛々たる中に奔走せる人間の哀れと、もし顕微鏡に照らせば全身砂塵に塗れて阿部川餅の如く地上に磁石の針を立つれば吸ひ取らるゝ土砂は悉く鐵氣を含んで、これを吸収する

人間は胃の腑を荒砥に擦り潰すが如し、

この阿部川餅の人間が荒砥に等しき砂塵を胃の腑に吸ひ込んで、さらぬも日夜の生活

難に追ひ廻され、たゞさへ人情、潰され、家に庭なく身に隙なく、
 め立てられ妻子に泣き立てられ、脳味噌は腐り手足は勞れて骨も皮も綿の如くなりて、
 うき世といふ大怪物の弄り殺しに逢ひ、その餌食になるべき今日の人間が、やうく
 一方の血路を開いて息の根を保つところ、まづ公園のロハ臺に如くはなし、
 公園といへば上野も芝の山内もあれど、やはり人間は俗中の俗物、あまり樹立の深き
 奥を好まず、博物館はなくとも動物園はなくとも、赤き山門はなくとも古き靈廟はな
 くとも、いざといはゞ直に飛び出す交通便利に日比谷の繁昌、いつも主人のない園遊
 會の如し、
 この公園に出入するもの、人間階級の大別これを三種として、まだ日の出でざる朝露
 に心地よく悠々と散歩するものは、いづれ近き邊に住む相當の人格を證するに足るべ
 し、されど夕暮の樹下闇を幸ひに四邊きよろしく見廻して入り込むもの、動もすれば

男女相携へて巡查の影に驚く怪しげの化物なり、また人として働くべき日中のロハ臺
 に腰うちかけて的もない空を惘然と打守るもの、多くは職を失ひ家を失うて人事意の
 如くならざる失意落魄の極なれど、もし眼前の苦境を節にかけて前途の希望と運命を
 トすれば、この中にこそ寧ろ却つて大物の未製品、必ず人間の面白き奴あるべし、
 されど見渡すところ十中の八九、まづロハ臺の惘然が其奴の最後にして、これより前
 途に屬すべき未製品なく、いづれも連日の空腹を抱へて顔色憔悴せる體、昔ならば立
 寄る影もなく、たゞうろくと路頭に迷ふべき筈なれど、今は公園のロハ臺
 に悠々と腰うちかけて、同じ空腹を抱へながらも歩かぬだけの得あり、
 恥を恥とも思はねば人の喫餘を拾うても紙巻莢を吸へる世の中、もし萬一の場合には
 慈善事業といふ商賣人あり養育院あり區役所の假埋葬あり、あまり人間の屑を取扱ふ
 始末が手近に便利過ぎて寧ろ運命の底より跳ね返るべき道に遠し、

この運命の底に沈みし人間の屑が、今うち出せし午砲にも驚かぬ筈、もとより其日の晝飯を無いものと諦めて、實は朝飯にも有り付かず日比谷公園のロハ臺に居並びつゝ、惘然とせる中に、何とやら際立って惘然とせざる一人の男あり、

食はねど血氣を失はぬ年輩二十七八、たとひ土方をしても二人前は取れさうな奴、春とは名のみ花も開かず空まだ寒き三月の上旬に雙子の素袷一枚、垢染みたる紡績飛白の綿入羽織を襟首より纏ひ込んで、繩の如く斜れたる紺木綿の兵兒帯に足袋もない尻切の麻裏草履、日夜の雨露に色褪せたる古帽子の鍔を深く下して、猶更ら光る眼に四邊を見廻しながら、現在の境涯を他日の誇り顔に少しも屈せず衰へぬ面魂、同じロハ臺に居眠る新聞賣子の賣れ残りを一枚、そつと引き出して讀み始めぬ、

その新聞を半以上も讀み終りし頃、今まで心地よけに居眠りし賣子先生、ふと目を覺して俄に心付いた顔色、

「おい君、おい〜君、その新聞は僕の新聞だらう」

古帽子は平氣に澄ましたものなり、

「さうだ、君が居眠ってる間に、ちよいと借りたよ」

「借りた、貸す新聞ぢやない賣る新聞だぜ、代價を貰はう」

「さう喧しく現金に迫るない、まア待てよ、今すぐだ、もう少しで讀み終るからね」

「いや、待つて居れない、うツかり午睡をして後れたから急ぐよ、一枚一錢五厘だが一錢に負ける、さア今日の新聞が一錢々々」

俄にロハ臺を放れて古帽子の前に立ちながら手を差出せば、その手の上に一錢銅貨と思ひの外、讀み終りし新聞を疊みもせず、ふはりと擴けたるまゝに載せて渡しぬ、

「たしかに返すよ」

「讀んで仕舞つて返すといふ事があるもんか、是非とも一錢」

「ない、一錢は儲置いて一厘もない」

「ぢやア何故、無断に引き抜いて讀んだ、苟くも僕のためには今日これが唯一の商品だ」

「失敬」

「たゞ失敬で済まないぞ、外の物と違つて新聞は新聞その物を返す返さないに拘らず讀んで仕舞へば代價を拂ふべきもんだ、それを拂はンといへば、つまり一種の竊盜罪だ」

賣子先生も書生あがりの今日、いかに窮すればとて破損もせざる新聞一枚の代價を、さのみ迫るべき筈なけれど、たゞ自己が居睡りし間に引き抜かれて讀まれたる立腹まぎれ、わざと意地に喚き出せば、いよく平氣に笑ひ出す古帽子

「は、は、は、は、いはいさうに君も到底、それ以上に出世の出来ない男だぜ」

賣子先生、かくても大に前途の希望を抱く身、いよく癢に觸つて眞赤に怒り出しぬ、

「昨日の新聞ぢやアない今日の新聞だ、一枚一錢、どうしても出せ」

「どうしても出せないよ」

「出せない」

「ないものは出せないから、黙つて引き抜いて讀んだのは僕が悪いとしても、その新聞で鼻を搔んだ理由でなし、さう意地になつて怒らなくつても宜いぢやないか、第一また君が自分の商賣を忘れて晝日中、この公園のロハ臺に居睡つてるからだ、もし目を開いて居りやア應へて借りるよ、は、は、は、しかし君、今日の新聞には別段、面白い記事も、なかつたね」

「目が開いて居りやア猶更、應へても貸さないぞ、賣物だ、居睡つてる間に黙つて抜き取る奴があるかい、今日の新聞が面白いか、面白くないか、そりやア其方の勝手

だ、此方は一枚一錢、是非とも貰はう」

「あれば遣るさ、わからないねエ、事實、無いから出せないんだ、無いものを君、どうして取る、東京中の新聞、どこでも本社の前まで歩を運べば無代で讀めるぜ、そいつを幸ひ同じロハ臺に居た君が新聞賣子で加之も夢中と來たから雙方の便利上、そつと引き出して讀んだ後を皺も寄せず破りもせず其まゝ返せば宜からう、また賣れば差支なく賣れるぢやアないか、ロハ臺で出來た事はロハにしる、お互に境遇は落ちて居ても人格は別問題だ、吝な事をいふない、持つてるだけの新聞が今こゝで直ぐ錢になるぢやアなし、どうだ君、外にもあるから讀んで見ないか、ぐらゐの雅量がなくては無効だぜ、時に外ア何と何の新聞があるね」

うかくすれば、また手を出し兼ねまじき横着さに、流石の賣子先生も思はず呆れて舌鼓を打ち鳴らしぬ、

「一枚一錢の銅貨を争ッてる意味ぢやアないぞ、いちく〜いふ事が癩に觸るからだ」古帽子、ますく沈著いて悠々たる態度、ロハ臺に身も動かさず、ふんと鼻頭に笑ひぬ、

「おい君、もし丸く太くなれよ、あまり神経が細くツて、尖り過ぎるやうだなア、いちく〜さう人のいふ事を癩に觸へて居ちやア今日の社會に立てんぜ、兎角この頃の奴は小さい美術的で、象牙細工の置物然と出來てるから危くツて困る、須らく男子は粗末でも風雨雷霆中に屹立せる銅像の如くなるべしだ」

眞正面より無遠慮なる古帽子の氣焔に中てられて、新聞の賣子先生ますく腹を立てど、とても口で叶はぬ敵手、さりとして手を出せば猶更ら薄氣味の悪い敵手、衆人環視のせぬうち去るに如かずと、そのまゝ癩癩の蟲を押へしが、さて何とやら残念に心得し顔色、おもはず振り返ッて捨科白を吐きぬ、

「や、驚いたく、随分これまでの間いろんな奴に出喰はしても見たが、こんな圖々しい横着な奴は初対面だ、まだ一枚一錢の新聞で僥倖よ、實ア何を取られても知らずに睡ッて居た最中だからなア、危険々々」

そのまゝ立去らんとすれば、ロハ臺の古帽子、たゞ首のみ捻ッて冷かなる苦笑ひの小皺を寄せぬ、

「一枚の新聞だから宜いが、もし金でも持つて居りやア取られるといふんだね、は、は、料簡の小さい男だ、さう世の中を君、びく／＼危険がツて居ちやア手も足も出ないぜ、安心しろ、生命さへ取られなきやア大丈夫だ、第一また同じ盜賊するくらゐなら君のやゝな痛々しい人間を規はないさ、世間は廣いからね、はッはッはッ」
刻むが如き大聲に笑ひ出せば、賣子先生「またもや我を忘れて立停りぬ、

「しかし油斷がならない、この廣い世の中に一錢銅貨たった一枚を誤魔化すために屁

理窟を並べる奴が、あるからなア」

「は、は、は、此奴まだ間違ッてる、實ア晝日中この公園のロハ臺で、あまり退屈だからね、無代で新聞を讀んだ御禮もありさ、かた／＼君の睡氣さましを兼ねて、ちよいと洒落に愚弄ッて見たんだよ、ところが案外の眞面目で氣の毒だなア、おい君、さう怒らない、喧嘩は喧嘩だ、あらためて心持よく互に話さうぢやないか、君だッて今日の新聞が一枚一錢と呶鳴り歩いて生涯を送る人間であるまい、僕も亦この公園のロハ臺に根が生えて動けない男でもないさ、二日越の腹は減れど脳味噌いまだ涸れず、身に羽翼なくとも世に飛ぶ業はあり、ねえ、君、は、は、は」

賣子先生「さう、馬鹿にせらるゝ心地、もはや相手にならず、たゞ去際の一聲を残しぬ、

「全體、君ア何といふ名だ」

古帽子、軽く首肯きぬ、

「は、ア一錢銅貨の怨恨に名を覚えて置くんだね、面白い、忘れるな、乃公は稻田一作といふもんだ、今こそ空腹を抱へて日比谷のロハ臺に凹垂れてるが、なアに糞、四五年の後には必ず君の耳へ聞える筈の姓名だぜ」
最後の息に吹き飛ばされし賣子先生、あまりの圖太さに呆れて驚いて無言のまゝ立去る後姿を冷かに見送りながらの獨言、

「弱い奴だ」

冷笑一番、つゞいて自己もまた立去るかと思ひの外、實は立去るものない稻田一作、やはり其まゝロハ臺に腰うちかけて動きもせず、目を射らるゝ日光に猶更ら深く古帽子の罫を掻き下しながら、こくりくと睡り始めぬ、いかに居睡ればとて大丈夫、これこそ鼻紙一枚も抜き取らるゝ恐れなし、

二日越の空腹、一身の前途、寝ても寝られぬ筈ながら、よくよく疲れしものか、但しは元來の天性、かういふ暢氣な奴に生れしか、凡そ二三時間は讀んで字の如く鼾聲雷を欺きぬ、

夢うつゝの身に沁み渡る夕風、わけて餓る勞れし五體ぞつと寒く、おもはず目を覺せば、いつしか日は西に落ちかゝりて四邊の樹蔭うす闇し、

「や、今日も暮れるわい」

一語に無量の感慨、なごり惜しげにロハ臺を立ちし身丈五尺六七寸、聊か近來の營養は不十分なれど、まだ確に體量は十八貫目前後の骨格、丸裸のまゝ切賣にしても世間普通よりは價のありさうな大男、のツそりと植込の間より出づれば、出合頭に當世式部の女學生二人、きやツと叫んで飛び退きながら足早に行き過ぎて振り返りぬ、加之も振り返りしのみならず、蓄音器に似たる聲を發して文句を遺しぬ、

「あら、まア、驚いた事」

「何でせう、あの人は」

「どうせ妾等の對照物ではなくツてよ」

「この清い公園の美を損ねますねエ」

ふざけるな、堂々たる一個の男兒、うぬ等の對照物にされて堪るか、そろく背闇に紛れ込んで何をしやアがる、それこそ公園の美を損ねるぞと、例の鼻頭に小皺を寄せ、冷笑ひながら、また悠々と歩み出せしが、さて歸るに家なく餓を凌ぐ一碗の食もなし、

生憎日は暮れ果て、空に星影なく、どんよりと曇りし闇の雨雲、ひんやりと肌に入る夜風の冷たさ、いづれ今夜は濡鼠と覺悟しながら公園を立出づれば、何者の豪奢か知らず帝國ホテルに不夜城の大宴會、劉曉として響き渡る千金の音樂、羨むにあらねど、

あれも人間、歎くにあらねど、これも人間、たゞ金のあると無いとの差別なり、

腹は減る、夜は更け渡る、行くに的なく歸るに家なく、たゞさへ春寒の肌薄き素裕をどしや降りの大雨に全身濡鼠となりて、まッ闇がりの立往生、かくなりては人間の智慧も工夫も當座の間に合はず、いかな強情我慢も眼前の苦境に叶はず、日比谷公園を立出でし時、帝國ホテルの不夜城を仰いで寧ろ反動力を起せし流石の稲田一作も、ここに始めて思はず身震ひをしながら聊か悄氣返りぬ、

人間は生理的の動物なり、高き理想よりも深き觀念よりも餘儀なき現實の問題、まづパンを得よとは争ふべからざる事ながら、さて人間また生きて居るばかりでは面白からず、犬猫でさへ無事に生命を繋ぐ世の中に、苟くも何等か生活以上の希望あるもの、たゞ徒らに白き飯を喫うて黄なる糞を垂れるのみが人生の藝能なるべきや、

こゝに於てか稲田一作、立ん坊にも劣りし深夜雨中の落魄を極めながら、意氣は今この雨を枕頭の夢に聴く暖衣飽食の人を羨まず、實は急いでも急がずとも、どうせ同じ濡鼠の身、どこを叩き起しても宿めてくれる筈なく、ある時間を経過せば必ず世の明けるものと心得、いつしか雨も霽れて日も照るべしと度胸を据ゑ、びしよ濡れのまゝ闇の中を悠々寛々と歩み出す勢ひ、わざとならねど正に是れ一個の豪傑なり、豪傑は元來の凡を抽んでたる人間の別種物と思ひの外、なアに實は己むを得ざる場合に致方のない自棄半分、時の境遇に壓迫されて凹垂れざる習慣が第二の天性となりて、いかなる艱難辛苦も平氣に過す奴なり、ありがたし我こゝに豪傑の修行を得たりと思へば、いよく豪傑に成り澄まして、寧ろ人知れぬ心の底に一の誇りを保ちぬ、この豪傑、ほそくと雨に打たれて闇夜を横行濁歩せる背後より、ぱツと照らす光と共に聲あり、

「おい、こら、待て」
 振返れば巡查なり、角燈を差上げて中腰に覗ふが如く此方を見透かす體、あはれ身に官服を纏うて月に幾何の給料さへ貰はねば、やはり我と同じ豪傑の仲間入をなすべきに、さても氣の毒に御苦勞千萬の業と思ひながら、呼び止める役目に出來た人間、呼び止めらるゝだけの怪しげに出來た今夜の我、加之も何かな敵手ほしやの折柄、これ幸ひの歩を停めて元氣よく答へぬ、
 「何か、用ですかね」
 稲田一作、そのまゝ歩を停めて振り返れば、巡查また急ぎ足に近づいて、ぬツと角燈の光を鼻頭に照らしながら、勵聲一番
 「貴様ア何だ」
 この貴様といふ一語は文字の正反對、どうしても頭の上らぬ奴に對うての言葉、まし

て巡査の口より出づれば、もはや或意味に於ける罪人扱ひなり。

「僕は稲田一作といふものです」

「稲田一作、何をする人間だ」

「何もして居りません」

「何もしない奴が今ごろ何のため、この深夜この大雨に傘も持たず何處へ行くんだ」

「や、何といふ事に就いての見解が違つてる、僕のいふ何もしないは無職業の意味で君が何のためといふ何は現在この僕を怪しい奴と見咎めての何でせう、實は何もしないから、何のためありません、どこへ行くにも行く的がなく、傘もないから致し方なく、已むを得ず此通り、びしよ濡れになつて居ます、決して怪しいもンぢやアない、どうか免して貰ひたい」

「免してくれ、いよく怪しい奴だ、兎も角も来い」

「別に歸る家もないから寧ろ幸ひ、来いといへば、相手の如何に拘らず何處へでも行くが、君に引かれて行くなア甚だ面白くない、また免してくれといふのは犯罪を見遁してくれといふ意味でない、つまり面倒だから御免を蒙りたいんだ、なるほど時刻が時刻で風俗が風俗だから、その點に於ては怪しい奴とも見らるゝが、實際の境遇上、こりやア餘儀なく茲に至つたので、もし悪い事をすれば夜中の雨に彷徨いて君に咎められる様な人間でない、魏々たる大廈高樓の玄關より拘引さるべき僕だ、はゝゝゝや、笑つては濟まないが、察して貰ひたいねエ」

巡査、再び角燈を鼻頭に突き付けて、じろく其顔を打守りながら、俄に言葉の調子を改めぬ、

「まア何でも宜しい、兎も角も一應、來なさい」

稲田一作も俄に氣を變へて首肯さぬ、

「や、よし、ぢやア同行しよう、びしよ濡れの雨に打たれて立往生するよりは結句、優勝かも知れない、時に變じて事に通ずるの利ありで、第一また食ふ物が食へるだらう、實ア二日越の空腹だ」

稻田一作、ほそくと深夜雨中の濡鼠となりて的もなく歩きしがため、巡査に怪しまれて引き行かれし外は、事實さらに何の怪しい點もない男、もし浮浪罪といふ罪名の下に處せば處せらるゝ筈ながら、天生の態度、どこやらに男兒腸の潔白さに言語應接のキビくとせし邊を却つて面白く感じられ、寧ろ現在の落魄窮乏に同情を寄せられし結果、其後の雨にも打たれず二日越の空腹に拘留所の辨當飯を喰ひ、加之も署中の警部巡查四五人より合計二圓餘の寄附金を得て、カラリと晴れ渡りし翌日の午前十一時ごろ、無事に其まゝ放還されぬ、

放還さるゝ間際、わざと殊更一時間を過して、笑ひながら正午の辨當飯まで乞ひ受け慇懃に感謝の言葉を残して悠々と立去りしが、立去る間際、また前夜の巡査が宿所姓名を聞きし後、幸ひ今日の非番を覘うて其巡査の家を訪れぬ、

横着といへば飽くまで人を馬鹿にせし横着なれど、また愛敬といへば一種の圓轉滑脱を帯びて、面に似合はぬ呵しりと愛敬のある男なり、

いづれ表街路でない裏道の借屋住居、乾したる襦袢に妻子あるを知りて、門口の格子戸を靜に引き開けぬ、

「御免なさい」

田舎より呼び寄せられて時日まだ間もないけに見ゆる質朴の細君、乳呑兒を抱へながら振り返りぬ、

「どなた」

「御主人、御在宿ですか」

わづかに二室の住居、主人の查公かくと見るや否、

「お、前夜の」

「は、前夜は大變、御厄介になりましたなア、いはゆる禍が變じて幸福となるの理だ、おかげで今日は聊か元氣を回復しましたよ、實は御禮かたぐちよいと」

「わざく、禮に來られては困る」

「なアに、わざく、來るほど用のある身體ぢやアないが、只お寄り申したので、もし御差支あれば、これで御免を蒙らう」

「別段、差支はありません、まア茶でも一ばい」

「ぢやア暫時お邪魔をしようかなア、しかし折角の御非番で、お疲れの最中さぞ御迷惑でせう」

わざく、來るほどの用もなく、さぞ御迷惑と知れば其ま、辭して歸るべき筈なれど、

實は今日も何處へといふ的のない稻田一作、

幸ひ此巡查を説き付けて四五日こゝに食客の内心、但し一日の恩を他日の一年分に報ふべき料簡、今この我を救は、五錢の白銅を以て百圓の圖に中るよりも確實なりと、

いかなる場合いかなる時も遠慮會釋なく自己を前途の大物として割り出しぬ、

人間の眞價は最も得意の時と最も失意の時にあり、今こゝに稻田一作、もはや殆ど是以上の落魄もない浮世の底に落ち込みながら、なほ身は貧にして心に富めりといふ顔色、もし他日の我門前に請願巡查の用あらば必ず此巡查を拾ひ上げてやらうとの心算、

されど眼前この暢氣者に腰を据ゑられし本人の迷惑顔、實は時に取ツての災難なり、「官服を着けて居ては或必要以外、さう立入ッて委しい事も聞けません、この東京へ來て十年の餘にもなるといへば、定めて故國の先輩とか親類とか、さし當ツて目下

の急を凌げる知己朋友も澤山あるでせう」

「そりやア随分、ありますかね、あるどころぢやアない、わけて僕の國から出てる奴は多いが、どれも是も癢に觸る奴ばかりで、話せる人間は一疋も居ない、中には二人や三人、聊か語るに足る奴のないぢやアないが、兎角この同郷といふ關係は妙なもの、何等か一の目的物に對うて是非とも協力せねばならん時に於てこそ、始めて用をなすが、何も事のない場合に於ける個人と個人の間は、互に相助けるといふよりも寧ろ一種の競争心があるため、却つて雙方に面白からん感情の生ずるものさ、また人間といふものは自己を廣告的に威張りたいたいのが疾病で、同じ助けるなら比較的、有難みを感じる事の薄い同郷人よりは、恩を記する事の厚い他國人に與へたがるものでね、は、は、は、つまり頼る奴も頼られる奴も兩損だ、あまり雙方お里が知れ過ぎていけない、主客の地位が長く明白に保てないで困る、僕の如きは猶更の事、

かういふ辯論的の無遠慮に出來てるから同郷の奴等、いづれも相通じて警戒嚴重に豫防線を張つてる工合だ、は、は、は、」

「なるほど、多少その點もありませうが、一時まア餘儀ない境遇で、さし當り他に道がないとすれば、やはり知らない他國人より知られた同郷人の方が、凡ての上にて便利でせう」

「いや、僕は郷里の奴等に頼る頼らんは別論として、一時の便利を得るために身を處したくない、もし單に目下の窮境を脱するのみの目的ならば、まさか前夜あの大雨に濡鼠となつて君の御厄介にはならないよ、は、は、は、」

「しかし食はずには居られない、どうして食へます」

「さア其處だ、無論、飢うれば死すべき身體を食はずには居れないが、また豚のやうに食つたばかりぢやア生きて居ても仕方がないから、そこが即ち人間としての大に

考ふべきところで、現在この稲田一作といふ奴の扱ひ方に困つてゐる理由で、は、は、は、どうだい、否、どうです、さぞ御迷惑だらうが、前夜といひ今日といひ、これも何かの因縁と諦めて、三四日この僕を置いて貰へまいか、實ア久しく身を横へて安眠しないため、酷く疲れてるやうだ、こゝに幸ひ諸君の同情を寄せられた二圓餘の金があるから、木賃宿でも何處でも寝る事は寝られるが、折角の芳志、この金を徒らに空しく費ひたくない、過ぎ去つた馬鹿さ加減をいへば酒色のため一夜に百金を抛つた事もあるだけに猶更ら今日の二圓この金は身に沁みて大切だ、無意味に落魄した貧乏書生の二圓と違つて、すぐ餓鬼のやうに食物へも嚙り付けないさ、いはゞ戦ひ敗れた軍將の最後に拾ひ得た彈丸だ、いかなる世の中の敵壘を覗いて貰くか、この砲臺を三四日の間、こゝに据ゑさせて欲しいもんですなア、は、は、は、」

午後の二時ごろより四時過まで立續けに饒舌り込んで、そろ／＼五時近くなれど更に

動く氣色もない稲田一作、加之も圖太く押強く其まゝ腰を落ち付けながら、三四日に置いてくれと出られて、たゞさへ迷惑顔の巡查、ます／＼閉口の體、

「なるほど、お易い事ですがね、御承知の通り薄給の身で、どうしても世話をしやらねばならない親戚の者さへ、實は已むを得ず斷つてくるらるですよ、第一また前夜あゝいふ次第で、無論、疚しい事はないにしろ、今朝放免した其人を家に置いては職務上、聊か困る身分ですからなア」

「いや、その邊は萬々お察し申すのみでなく、さらに理由のない、すう／＼しい奴だから、大喝一聲の下に叩き出されても仕方のない筈ですがね、今いふ通り諸君の同情に寄せられた折角の二圓、こりやア一文も無駄に費ひたくない、今日の僕に取つては浮世に打ち出す最後の彈丸だ、また長く十日も二十日もといふぢやアなし、わづか、こゝ三四日の間」

「時日の長短に拘らず、それが困るんです、實際また失敬ながら、よし三四日こゝに居ても、その三四日の後は、やはり同じ境遇でせう」

「ところが同じ境遇を再び演じない確かな覺悟あればこそ、二日越の空腹を抱へて深夜の雨中に濡鼠を平氣の僕が俄に今この場合、かういふ弱い音を吐いて斯くまで見苦しい事を押強く無理に頼むんです、定めて迷惑だらうが、でせうが、どうです、いはゞ時の災難と諦めて、この迷惑を三四日、背負ひ込んで下さるまいか、いくら窮しても、まさか一時の瘦腹を肥すため、この大切の首骨を曲けてまで頼む男ぢやアありませんぜ、實は久しく無意味に捨て、置いた頭腦の中へ、急に何か物が這入ったやうな工合だから、此奴を取遁さないやうに願はくは此まゝ三四日の間、そつとして置きたい、そつとして這入った物が落着きさへすりやア、必ず何等か面白いことを産み出しますからね、はゝゝゝ」

「まるで煙に捲かれるやうですが、それほどの御依頼を、や、よろしい、しかし實際三日か四日ですな」

「今日の半日を加へて四日です、感謝と共に立去る日を除いて中間、正味は二日ですが、この二日は雙方お互の生涯中に忘るべからざる記念日で、よほど深い印象を遺す決心ですよ、はゝゝゝ」

あくまで無遠慮に大口たゝいて威張り散らしながら、いよくこの巡查の家に居坐り込みぬ、

さても此奴、その三四日の間に何をするやら、

敵も味方も手當り次第に取ツて以て其場の用となす稲田一作、されど取ツて以て用いせられた巡查こそ不意の災難、今更ら叩き出されもせず、また出して出ぬ奴、いよ

いよこゝに根を生して其まゝ、食客のを極め込みぬ、

口頭では三四日なれど、實際は中間二日のうちに脳味噌を洗うて何をか仕出來すといふ勢ひ、加之も僅に二圓の金を以て生存競争の激しき今日の中へ何を仕出來すかと思へば、別に腕を組んで沈黙考の體もなく、壁に倚り目を閉ぢて思案工夫の様子もなく、その日の夕飯を平氣に食ひ終るや否、まだ寢床に就かざる主人の巡查と乳呑兒に泣き立てらるゝ細君の手前も憚らず、お先へ御免を蒙りて忽ち身を横たへ、龜の子の如く夜具の中へ手足を縮めながら、ぐうぐうと四邊かまはぬ鼾の聲のみ高く聞えぬ、

や、大變な奴に押込まれたと思ひの外、その翌日は打ツて變りし俄の調子、いまだ夫婦の起き出でざる早天に飛び起きて、なみ／＼と臺所の水を汲み、甲斐々々しく家の裏表を掃き、届く限りの雑巾がけは勿論の事、慌て、遮る細君に口も聞かせず手も出

させず、味噌を摺り飯を焚き、主人が出勤の靴まで磨いて、いかに達者な下女も下男も及ばぬ働き振に、夫婦また思はず呆れて目を見合せながら、ます／＼出すに出されお置くに置かれぬ苦しさを、稻田一作、振り返りて例の鼻頭に小皺を寄せぬ、

「ずう／＼しさも横着も一人前以上ですが、また氣の付く事も働く事も一人前以上でせう、萬事この通りで、浮世あらゆる方面に對して、能はざるにあらず爲さざるなり、善惡ともに雙方どツちへでも向きますよ、は、は、は、大名にも適當、乞食にも適當で、たとひ奉公しても、食客しても、まづ行くとして可ならざるなしだ、これ以案外この面が女に持てた事もあるから妙でせう、はッはッはッ」

いよく、呆れて主人の巡查が眉を蹙めながら出勤せし後、細君また乳呑兒を抱きながら手内職の編物に掛りし後、何をするかと見れば、裏口の井戸端にシャツ一枚の勢ひ、久しく日に曝され雨に打たれ垢に染み込みし着物の洗濯羽織の丸洗ひ、古帽子まで水

に揉みぬいて、幸ひの日和に高く軒先へ乾し懸けながら、家内を差覗いての大聲、
 「奥さん、甚だ御無心だが御主人の寢衣か何か、ちよいと貸して下さらないか、これ
 からシャツと猿股の洗濯だ、今日中には乾くだらう、急に思ひ立ッた俄の出陣で、
 なかく忙がしいわい、は、は、は、」

丸裸となりて一切の丸洗ひ、ついでに泥まぶれの麻裏草履も、ざぶ／＼と洗ひ上げぬ、
 羽織と着物と兵児帯とシャツと股引とは一本の竿に通して幔幕の如く横に高く軒端へ
 渡し、古帽子と麻裏草履は二本の竹に引ッかけて獄門首の如く地上に立て、その中央
 に主人の寢衣を借着の一作、自己の身體も日に曝しながら微笑を含んで細君を見返り
 ぬ、

「や、なかく骨が折れたわい、しかし奥さん、見て下さい、おかけで洗濯が出来て
 仕舞ひましたよ、幸ひ今日は近來にない春日和だから、どうか斯うか夕方までには

乾くでせう、衣類の洗濯は誰でもするが、ついでに帽子と草履の洗濯、こりやア人
 の氣の付かないところだ、は、は、は、實ア洗ッても揉ンでも同じ襪着物ですがね、
 いよく俗物を敵手に俗世間へ出る以上、襪襪は襪襪だけに猶更ら汗臭く垢染みて
 居ちやアいけない、まアこれで當座の甲冑はよし、軍用金二圓、ちと心細いが、奮
 ツて進めば何とかして戦へるだらう」

細君、障子の破れ目より差覗いて、おもはず吹き出しぬ、

「おや、帽子や草履まで洗濯なすツたの、ほ、ほ、ほお着物だツて、さう丸洗ひでは今
 日中に乾き難いでせう、よくお絞りなすツて、もし乳呑兒さへ無ければ妾がしてあ
 けたに、糊を付けましたらうねエ」

「ありがたう、いたゞいた洗濯石鹼も糊も皆、すツかり費ひ切ツて仕舞ひましたよ」
 「あらまア、石鹼は兎も角、あの糊を、あれだけの糊を、ほ、ほ、ほ夏の單物と違ッて

只、ほんの心持、後で妙な小皺の寄らないやう、うツすと水に溶かせば宜いで
すに、とんだ事を、しましたねエ、ほ、ほ、ほ」

「聊か糊氣が過ぎましたかね」

「過ぎたところですか、乾くと大變ですよ、それこそブリキのやうに強張ッて、身
體が痛いくらゐでせう」

「なアに大丈夫、安心して下さい、時と場合で針の筈も平氣に坐る男だ、地獄の釜の
一足飛び、劍の山へでも駆け上りませ、は、は、は、着物の強張ッて痛いぐらゐは頓
着しない、今までのやうに垢染みて、ベト、ベト、するよりやア寧ろ優だらう」

世間普通の習慣より、つい口先で三四日といへば、早くて五日か六日になり勝の人情、
まして萬事の調子が豪傑肌の不羈僮に傾いて、一點さらに小心翼翼の男とも見えぬ

稲田一作、いづれ十日ぐらゐは此ま、無理往生に居坐り込むものと思ひの外、實際の
中間二日を置いて三日目の朝、加之も例の拭掃除までせし後、約束に違はず飄然とし
て立去りぬ、

立去る時の態度また案外の慇懃を極めて、巡查夫婦に残せし感謝の言葉いよく眞面
目なり、

「や、とんでもない厄介物で、さぞ御迷惑でしたらう、わけて何の縁も由緒もない奴
が、ずう／＼しく無理に押込で、さうざ御世話になつたんですから猶更の事、こ
の御恩は生涯、決して忘れませ、きつと他日、あまり遠からぬ將來に於て必ず、
あらためて御禮に罷り出ます、わづか日数は三日でも雙方の境遇上、富豪のために
十年も救はれたよりは深く感謝して居ります、御主人、奥さん、御機嫌よろしう、
ほ、ほ、ほ、御成長と幸福を羨ながら祈りますぜ」

今更ら何となく名残り惜しけの夫婦、もう二三日といへば、いや敵は間近し出陣の時刻は迫れりと笑ひながち、ぶらりと立出でし稻田一作、當年こゝに二十七、もとより美男ならねど、まづ男としては然のみ見苦しからぬ容貌を備へて、體量と骨格は確實に一人前以上の大兵、いづこの方角に如何なる獲物を見付けて覘ひ行くやら、飢ゑたる猛獸の餌食を漁る意氣、のそくと歩み出しぬ、

されど羽織も着物も兵兒帯も自家一流の丸洗ひ、シャツも股引も古帽子まで調子外れの糊氣に強張り過ぎて、頭に兜を戴けるが如く、身に袴を着けたる如く、歩めばゴソくと音高くチクくと肌を刺さるゝ心地、こいつ聊か妙でないと思ひながら、さて其まゝ、大道の立往生も出來ず、首を据ゑ五體を浮かし面を皺めて歩み行く背後より不意に女の聲、

「おや、稻田さん、ちよいと貴君、稻田さんでせう」

一作、おもはず振り返れば、二十八九の美人、あくまで今こそ丸髷の素人風になり澄ませど、いづれ近來まで戸籍面の外に別の名を唄はれたらしい女、それと見て氣輕く小走りに近寄りぬ、

「あらまア稻田さん、其後どうなすツて」

自然の男殺しに出來たる愛敬を浮べながら、じろく、訝かしげに眉を蹙めて一作の姿を打守りぬ、

「貴君まア何といふ、お着物を召して在らッしやるの、まるで御祭禮の山車人形です

よ、ほゝゝゝ」

深夜雨中の濡鼠となれば忽ち巡査に見咎められ、白晝丸洗ひの洗濯物を着ては忽ち女に呼び止めらる、不思議や雨に打たれても日に曝されても無事に歩けぬ男なり、されど巡査に見咎められしは怪しい奴と思はれしがため、今この女に呼び止められし

は昔馴染のため、加之も何の因縁なき其巡查の家に逆寄せして平氣に三日も居坐りしほどの男、もし多少の因縁あるべき女の聲に振り返りし以上は、たとひ乞食になるとも、それが恥づかしいとて遁け出す奴でなし、

「やアどうだい、久しく逢はンねエ、しかし長持のする花だ、天の生せる容色ますます美にして、もう三年にもなるが少しも變らないぜ、たゞ變つたのは頭の丸鬘と着物の素人風になつたばかりだ、察するところ、うまく罪を遁れて誰か一人、とツ捉へた奴があるらしいね、畜生、奢れ、は、は、は、どうしても世の中は女に限る、この稲田一作ア儲も其後さるほどに、これ見ろ、かういふ状態だ、わけて世間普通より少々、骨ツほく出来てるから賣口が遠いよ、はツはツはツ」

刻むが如く例の大口あいて笑ひ出せば、女も思はず吹き出しながら、じろく、稲田一作の顔と風俗を打守りぬ、

「相變らず暢氣で在らツしやる事、以前から御風俗なンかに關はない方は方でしたが貴君まア、其お召物は何といふンですよ、あまり變ぢやアありませんか、ほ、ほ、ほ、」
「これかい、こりやア乃公が昨日、洗濯したんだ、丸洗ひの手際は宜かつたが、聊か糊氣が過ぎて、ちと着心地が悪いやうだ、しかし乃公が思ふほど人が見て呵しくあるまい」

「呵しいか呵しくないか、第一まア貴君、お帽子まで妙な工合ですよ、いやに角張つて變ですもの」

「ついでに帽子も洗つて十分、糊を付けたからさ、同じ洗つた中に糊氣のないのは足に穿いてる草履ばかりだ」

「あら、まア、いくら恍けても草履を洗つて糊を付ける人がありますかね、冗談は儲置いて、誰にも頼まず貴君が御自分で、お洗濯なさるンですか」

「頼む奴があるかい」

「なくツても貴君、外の人と違ツて」

「頼む奴より、錢がないンだよ」

「まさか、ほ、ほ、ほしかし眞實、お洗濯の工合が貴君です事、して見ると稻田さん、

まだ貴君お一人ですか」

「御丁寧な事を尋ねるよ、どうして此稻田に二人といふ數が出る、もし嗅アでも持つて夫婦になりやア、それと同時に多人數の召使もある筈の男だぜ、いくら賣口が遠いにしろ、も少し面白く買ツてくれ」

「やはり稻田さんです事、そこが貴君ですよ、眞實お一人なら失禮ですが、妾、當分お引受け申しませうか、貴君のお身體を、ねエ」

「おい、おい、この往來で妙な事を言ひ出さない、今ア藝妓を廢めて立派な丸鬘

になツてるぢやアないか、危険々々、いつまでも浮氣の蟲の治らない女だぜ、は、は、は、

「あら、稻田さん、ずうくしい事を仰しやるワ、どんな不自由したツて妾が貴君を眞平ですよ、ほ、ほ、ほふざけずと眞面目に聞いて下さい、妾の口から貴君を引取るといへば、そら、ね、分ツてるでせう」

「いや、分らない」

「わからない事がありますかね、かはいさうに、さんざ苦勞のさせツ放しでさ、どんなに恨んでるでせう、かうして妾が逢ツた以上、もう遁しませんよ、さア稻田さん、よけいな文句は聞きません、兎も角まア妾の家まで入らツしやい、この變な洗濯物の着工合でも見せるのが、せめて彼女への義理ですよ稻田さん」

よもやと思ひの外、面にも身にも似合はぬ色男、これは案外の出來事、けしからん風

流罪を持ちし奴なり、

途中もし女に呼び止められしといへば、踏み倒した下宿屋の婆アに手厳しい催促せらるゝか、案外もし戀なれば墮落の野合まだ手の切れぬ女學生の腐れ縁に繋がるゝか、乃至また振り捨てた下女の怨恨に胸倉を取られるぐらゐが關の山、その他に於て凡そ女らしい女が稻田一作を呼び止めるとは不思議の至極、加之も仇ッほい小三十の美人とは猶更の事、無論これは人間違ひで濟むべき筈ながら、さて人間違ひで濟まぬ昔馴染の雙方、たとひ直接の關係なくとも互の胸に覚えありて、このまゝ無事に歸さぬといへば、このまゝ無事に歸れぬ顔色、いよく以て此奴けしからん奴なり、

「仕方がない、さア何處へでも勝手に引き摺ッて行け、行くとなれば實際、さのみ他に用があつて急ぐ身體でもないからなア、はゝゝゝしかし背負ひ込んだ後で困るなよ、生物だぞ」

「何、困るもんですか、生物は承知して居ますよ、つまり生きてるから貴方のやうな方でも外に向け口があるんでさアね、もし死んだ死骸なら誰が引取りますものか、ほゝゝゝ」

「や、酷い事を吐すぜ、相變らず面ア優しいが舌の根に毒を持った女だ、もし其、向け口が塞がッてたら、どうする」

「大丈夫、開けて待ッてる事を知ッてるから、無理にでも引ッ張ッて歸るんですよ、もし萬一、塞がッてでも居りやア當分、妾の家で生かして置いてあげますからね、その邊は御安心なさい、過日も稻田さん、家の犬が三疋も子を産んだ上、また人に頼まれて一疋、餘計に貰ひましたよ」

「おい、おい、妾の家で生かして置いてあげますも宜いが、この乃公を犬ッころ扱ひは酷過ぎるよ、たとひ親の仇敵だッて女といふものは、も少し情のある口を訊

くもんだ、もし乃公が雌を相手にして喧嘩するやうな男でもありやア汝、とんでもない目に逢ッてるぞ、ちと謹慎め」

「あら、妾、雌ですか」

「雄ぢやアあるまい」

「とても貴君には叶ひませんよ、黙ッて歩いて下さい」

「は、は、は、此方は黙ッて歩いてるんだが、其方で饒舌るからだよ、どういふもんか汝と乃公とは昔から交誼が悪かつたぜ、なア、は、は、は、」

「稻田さん、妾と貴君と二人の時は、おのれでも汝でも構ひませんが、人の前ぢやア、せめて名を呼んで下さいよ、憚りながら今ア獨身者でないんですからね、お氣の毒さませ」

「つまらない念を押さない、さういふ間ぬけた男と思ッてるか、もし汝の目的でも來

築地二丁目の小意氣な一廓、わざと生節を自慢の板塀に植ゑ込みし隙間より見ゆる奥二階、四谷丸太の潜り門に『川合うた』といふ女名前の表札、いづれ米の値を知らぬ住宅なり、

りやア奥様とか御新造様とか、お好み次第に言ッてやるよ、その代り一度、奥様といへば後で一圓だぞ、御新造様は特別の割引だ、五十錢に負けてやらう、だがね、藝妓を落籍して妾にするやうな野郎は得て嫉妬深いもんだ、もし乃公を妙に履き違へて變な騒動になりやアしまいか、どうも履き違へられさうな氣がするわい」
「ほ、ほ、ほ、大風に灰を撒いたやうな貴君でも随分、時と場合で見かけに依らない苦勞性な病が、ありますねエ」

「このやア大膽細心と言ッてね、英雄また別に彫蟲の技ありだ、は、は、は、」

二階は或必要以外、みだりに人を通さぬ座敷として、平生の居室は階下の八疊、桐の長火鉢も紫檀の茶棚、更紗の腰張襖に燃ゆるが如き花絨氈、玩具に等しい小道具を飾り付けて、友禪の座蒲團に身を置きし女振、いかにも妾宅として遺憾なき住居なれどその以前に自家一流の洗濯物を着て大胡坐の稲田一作、これは案外また不相应の客來なり、

「なるほど小ぢんまりとして、小ざツぱりと手の届いた意気な住居だな、まさか借家ぢやアあるまい、こゝへ汝のやうな不經濟の人間を内々そツと入れて置いて、をりをり通ツて来る奴、とても貧乏で出来ない藝だ、しかし會社の金でも誤魔化してる野郎ぢやアないかね、危険だぜ、氣を付けろよ」

「御安心下さい、憚りながら、稲田さん、そんな臭い旦那ぢやアありませんからねエ、ほゝゝゝ」

「や、此奴、妾の法に外れて聊か旦那に御坐ツてるわい、はゝゝゝなアに實は旦那は旦那で、どうでも宜いが、やはり昔馴染で、汝の身を案じてやるんだ、その危懼さへ無きやア結局、かうしてる方が氣樂で、分相應の境涯だ、なまじツか玉の輿に乗り込んで奥様とか何とか、いはれたところで到底、我まゝ三味の自墮落に育ツて来た身體だもの、辛抱の出来る筈アないからねエ、川柳子、詠うて曰くさ、お妾は二世と三世の間のもの、つまり二世を契ツた夫婦でもなし三世の約束ある主従でもなし、その間のものは面白いね、實に穿ツてるよ、はッはッはッ」

「おや、また人を馬鹿にしたやうな、妙な笑ひ方をなさるよ、いけ好かない、かまはずに置いて下さいまし、貴君の御厄介にはなりませんからね、稲田さん」

「怒ッては困る、さう怒らない、いくら乃公だツて怒られると少々居憎くなるよ、馴染は馴染でも現在この乃公が昔の情婦にした女で、今かうなツてるところへ來た理

日、絶えず往來してゐるんですよ」

「近所でも遠くても、そりやア彼女の勝手だ、今の乃公に何の事もないのさ、は、は、は、」
 「ないで済みますかね、さんざ苦勞のさせツ放しでさ、それも女に苦勞させるだけの貴君なら兎も角、いくら眞目に見たツて妾なんか眞平ですワ、ほ、ほ、ほ、つまり小常さんが悪いのさ、世の中に男の数は腐るほど有り餘ツてるに、まして其ころは羽翼が生えて飛ぶやうな流行ツ妓ですもの、どれでも撰取に出来る身で居ながら、まア何だツて貴君のやうな方に惚れたンでせう、ふしぎにも程度があるぢやアありませんか、おまけに藝妓を廢めて仕舞ツた今でさへ、まだ目が覺めなくツて、ちよいく、貴君の事を言ひ出すんですよ、かはいさうに全く何かの因縁ですわねエ」
 「は、は、は、譽められてゐるのか貶られてゐるのか、さツぱり分らないぜ」
 「此方が分らないんですよ、外の事には少しも疎漏のない人だに、何故あの小常さん

が、あ、だらうかと思ツてさ、もし妾と血を分けた姉妹なら否でも應でも、ぎゆうと意見して、諦めさす法もあります、何分、根が他人ですからねエ、仕方なしに匙を投げてゐるんですよ、考へて御覽なさい、今時の人情に男も男に依りけりで、とりわけ貴君のやうな人を、三年も忘れずに思ツてくれる人がありますかね、加之も世間では薄情家業を看板に掛けてゐる藝妓ですよ、勿體ない」
 「勿體ないは酷いね、そろ／＼乃公の方が可哀さうになツて來たぜ、は、は、は、とここで彼女この近所で、どうしてゐる」
 「彼女々々ツて、さう貴君、ふんだんに彼女呼ばはりの出來ない身體ですよ、實は貴君よりも男振の好い立派な旦那があツて、妾と同じ境涯ですから」
 「は、ア、兩女とも揃ツて二世と三世の間のものかい、こりやア面白い、こいつア妙だ、分相應に能く出來た身の終局だ、は、は、は、藝妓の時代も同じ穴から首を揃へて

出てさ、その藝妓を廢めた今また兩人とも揃って人の妾は宜いね、加之も遠く離れぬ御近所で、をりくでなく毎日の往來、や、これこそ何かの因縁だぜ、は、は、は、」

日比谷公園には夜の十二時といふ制限あれど、垣も門もない上野と芝の山内に幾夜の雨露を凌ぎ、やうく近ごろ屋根の下で寝たは巡査の家に三日の食客、この上は二圓あまりの軍用金を以て木賃宿の外、もはや身の置きどころもなく、また固より其覺悟で立出でし稻田一作、今こゝに人の持物ながら妾宅住居の絹夜具に包まれ、枕頭に酔醒の水あり食後の菓子あり、久しく香も嗅がざりし埃及の紙巻とマニラの葉巻まで添へて、もし御用があれば何時でも手を鳴らして下さいといふ待遇振、夢でないかと疑ふべき筈なれど、此奴なかく圖太く確實に性根が据りて、さらに御遠慮申さず手を鳴らしぬ、

「何か、御用で」

静に襖を開けて差出す下女の顔を、じろりと寝ながら振り返りて、自己が此家の主人らしき顔色、

「いつの間にか電燈が點いたね、もう何時だ」

「はい只今、十一時で御坐います」

「十一時、まだ早いな、久しぶりの夕飯に酒が付いて居たから、すツかり酔ッて仕舞ツた、時に今夜ア來ないのかね、こゝの且的は」

「どうで御坐いますか、をりく十二時を過ぎて、不意に遅く入らツしやる事も御坐いますから」

「さうかい、や、さうだらうなア、まさか晝間、のこく日中に大手を振ツて來るやうに出來て居ないからねエ、は、は、は、とところで、あの何は、全體、汝なア此處の

名前人を、平生に何と呼んでる」

「ほ、御新造様ですか」

「は、ア御新造様か、つまり割引の五十銭だね、いや此方のこった、その御新造、もう寝たかい」

「いえ、ちよいと外へ」

「外、外とは何處だ、いつ何時、不意に旦那が遣ッて来るかも知れない身で、今ごろ何處へ往った」

「どちらで御坐いますか、今ごろ只お一人で手軽く往らッしやる場所は、この横町の杉本さんより外に」

「そ、その杉本、そりやア杉本常といふ家だらう」

「あら、よく御存じで」

「をりく、その、杉本常といふ奴ア此處へ遊びに来るかね」

「をりく、どころでは御坐いません、御新造様とは大の御交誼よしで、日に一度ぐるゐは雙方から、きツと往ッたり來たり遊ばしますよ」

「なるほど、そいつア交誼の好い友達だな、實ア兩人とも昔、乃公が心易くしたもんだよ、ついでに聞くが、この旦那は何といふ名で何をする人だ、また杉本の方も聞きたいね」

「ほ、妾には委しくわかりませんから、いづれ御本人に、ほ、ほ、」

下女は下女でも妾宅に奉公するほどの下女、平生より萬事の調子を呑み込んで、うかと人の口車には乗らず、笑ひながら立去る後に稲田一作、夜具の中より鎌首を持ち上げて額越に天井の電燈を見詰めたるま、何をか思案の體、

久しく空腹を抱へて宿もなく雨露に打たれしものが、思ひも依らぬ俄の美味に飽き酒に酔ひ、たま／＼不意の絹夜具に包まれしのみか、別れて後こゝ三年の戀女が今なほ昔を忘れぬ情緒ありと聞けば、木石にあらざるかぎり胸は轟き心は浮き立ちて隠せど隠せぬ筈、いかな寝坊助も寝るに寝られぬ筈ながら、稻田一作、ふしぎに其まゝの高軀、殆ど人間の不自然に出来たる奴なり、

されど木石に等しい不自然の一作も、寝るだけ寝れば自然に目が覺めて、おもはず耳に入る襖越の聲、

「前夜あれから直ぐ飛び出して来ようと思つたにさ、運悪く旦那が来たんだもの、いくら何でも、まさかにな、氣が咎めて平生の智慧も工夫も出なくなつて仕舞つたのよ、ほゝゝゝ」

「いえ妾も實は、さう思つたのさ、生憎なもんだねえ」

「だから今朝ア早く、すまないが無理に追ッ立てゝさ、まだ朝御飯も喫べず其まゝ飛び出して来たのよ」

「朝御飯は未だかも知らないが、何そのまゝで直ぐなもんかね、ぐづくとお湯に這入ッて、さんざお粧飾をしてさ、ほゝゝゝ萬々お察し申しますよ、泣きの涙で三年も別れて居た人に、逢はうといふんだからねエ」

「あら、さういふ理由ぢやアないンですよ」

「なくツても、あツても現在、それだもの、つい近所で毎日かう心易く妾の家へ来るに、そんな念入の御粧飾をして来た事があるだらうか、ふしぎに常ちやんは稻田さんのため、まるらされてるよ」

「馬鹿々々しい、誰が、あんな人に、まるツてるもんですかね、つまり三年前の怨恨を思ふ存分、いつて見たいからさ」

「無効々々、いくら蔭で威張ツても、いよく面と向へば青菜に鹽さ、かういへば氣に觸るかも知れないが、眞實よ、男が美しいでなし、お金があるでなし、おまけに口が悪くツて横柄で、萬事ぶつきら坊でさ、どこに女の好く點もないが、儲あの稻田さには一種、いふにいはれない呼吸があるんだからねエ、幸ひ妾なんか無事で濟んだが、實は怖ろしい人だよ、しかし係り合つた身になりやア、なるほど三年が五年でも、忘れるに忘れられない人だらうね、ほ、ほ、ほ」

「そんな事は兎も角も妾、だしぬけに胸倉でも取ツて、ぎゆうぐいはさなきやア承知の出来ない人だよ、何處、どこに寝てるの」

「もう、それだもの、堪らないねエ、胸倉を取るも宜いが、妾の家では眞平だよ、きのふ途中で逢ツて此家まで引ツ張ツて來た御禮から先にして貰ひたいね、その上で本人を引取ツて、煮るなり焼くなり喰ひ付くなり、そりやア御勝手次第さ、どんな

騒動になツても仲裁は御謝絶して置きますよ」

襖越の稻田一作、思はず首を縮めて、すほりと夜具の中へ藻潜り込みぬ、

他人の事は兎も角、よかれ悪しかれ現在の我事を手に取る如く襖越に聞いては流石の横着物も今更ら出るに出不れず、また其ま、夜具の中に藻潜り込みしが、やがて二人のうちの一人、そつと來りて靜に枕頭へ坐りし様子、

彼女か、此女か、いづれにせよ、今の談話振では我に對して聊か形勢不穩の女ども、うかく首を出されぬ場合なれど、儲いつまでも寢ても居られねば、やうく今こゝに始めて目が覺めし體、むくく動きながらの獨り言、

「あゝ寢たく、よく寢た」

わざと何氣なき目を枕頭に注いで、はつと俄に驚ける顔色、思はず不審の眉を擡めぬ、

「や、小常ぢやアないか、どうして汝こゝへ」

鎌首を立てしまゝの額越に見上ぐれば、自然の人情に引かれて無量の感慨、いかに忘れても捨てゝも懐かしいものよ、三年以前の伊達に唄はれし藝妓島田、まだ春に後れねど其後の花は知らず、身の成行と共に今は當世風の廂髪となりて、どこやらに沈み勝の風情、おもはず目に持つ涙を袖の端に拭ひながら、じつと男の顔を打守りぬ、

「稲田さん、久しく逢ひませんねエ」

かうなれば稲田一作も案外見かけに依らぬ色男なり、そろく夜具の上に取り直りながら、寢衣のまゝの腕を組んで、平生の洒落も毒口もなし、

「三年だもの、久しいよ、どうしたかと思つて實ア、蔭ながら案じて居たんだぜ、しかし達者で宜いね」

「貴君も其後、どこも悪くなくつて」

「相變らずの乃公で、まづ身體だけは元氣だよ、時に汝、この近所に居るといふぢや

アないか」

「さうですよ、つい、この横町ですが稲田さん、あれから妾、いろくゝな苦勞しましたよ」

「や、その談話は廢してくれ、そいつを委しう聞かされると少々、乃公の方に割が悪、い、すまない事が多いからねエ、だが兎に角まア長くて手柄にならない藝妓を退いただけでも出世だ、まさか元は他人ぢやなし、身の落着を見れば、安心するよ」

「だって稲田さん、貴君、あんまりですよ、いくら何でも、あんまり貴君ア酷過ぎますよ」

「わかッてる、わかッてるさ、その邊は萬々、わかッてるからね、過ぎた事は一切、清く水に流してくれ、昔は昔、今ア今だ、ね、全體また汝だつて、きけば獨身者ぢやアなし、さう乃公にばかり喰ッて掛ッて、深い怨恨のいへる身でも無からう」

「おや、稻田さん、この獨身者でない妾には、誰がしたのです、誰のおかけですか、藝妓を退いたのも妾は、めでたく退いたンぢやアないンですよ、實は貴君のため、つまり貴君の後始末を付けるため居るに居られず退いた妾が今、かッなッて何が不思議です、口惜しい、どうして妾、さう貴君に不足らしく、いはれるンです、かうなれば妾、もう狂氣ですよ」

俄に襖越の聲、

「常ちやん、確實おしよ、そこだよ、妾が付いてるからね」

一作、おもはず首を伸ばしぬ、

「おい、馬鹿な火の手を添へちやア困るよ、水でも持つて来て助けてくれ、大變だ
い」

いかな一作も小常といふ女に對うては、ぐうの音も出ず、實際また出されぬだけの事

ありて、書けといは、謝罪證文の一札も書くほどの閉口頓首、

「どう恨まれても責められても、すまないの一點張だ、乃公が悪かつたといふ外に言葉アないよ、もし相手が男で五分五分の喧嘩腰なら二十人三十人すらりと人垣を築いて來ても平氣だが、自分の迷惑をかけた女に出逢ッちやア弱いもんだ、加之も義理と人情の柵、こいつア叶はない」

「知れた事ですよ、義理も人情もなくなられて堪りますかね、いくら無頓着な貴君にしろ、弱くなるのが當然さ、それで強くなりやア鬼ですよ」

「だから何をいはれても、佛のやうになッてるぢやアないか、は、は、は」

「おや、呵しいンですか」

「御免下さい」

「もう、それだよ、貴君ア、すぐ人を、鼻頭の馬鹿にして掛るンだもの」

「いちくくさう理窟詰に窘めてくれるない、さらぬだに浮世といふ奴に三年以來、ぎゆうと窘められて来た乃公だ、随分、酷く遣られたぜ」

「いゝ氣味だ事、妾の怨恨だけでも、それくらゐの罰は中りますよ」
また不意に襖越の聲、

「常ちやん、まア其邊で一幕、ちよいと下した方が宜いよ、兎も角も朝御飯を喫べさした上で、また改めて十分、みツしりと遣るさ、無論、今度は妾も加勢に出るからね、ほゝゝ、稲田さん、お顔は此方で洗ッて下さい」

稲田一作、面を皺めて苦笑ひしながら、猫の如く四つ這ひに夜具を這ひ出でて下女の案内に従ひ、やうく顔を洗うて立戻れば、朝飯の膳に過ぎたる御馳走は御馳走なれど、その前に兩人もろとも目を峙て、待ちうけ顔、

「さア、稲田さん、召上れ」

「交るぐ二人で、お給仕しますからね、御遠慮なく」

一人でさへ持て餘せしに二人うち揃うて膳の前に坐り込まれ、ますく閉口の體、

「驚いたね、こりやア驚いた、何故、かう酷い目に逢ふんだらう、せめて飯の時だけ許してくれよ、これぢやア食ッても身に付かない、まるで意地の悪い繼ッ子扱ひだ、針の筵に坐ッて砂利を嚙むやうだ、いくら咽喉の樋が太くッても少々、通り兼ねるよ」

されど箸と茶碗を手に取るや否や、悠々たる大胡坐に無遠慮の兩腕を張ッて元來の大食、久々の美味なかく咽喉に通る兼ねるところか、四邊に目もくれず餓鬼の如くに取付いて、むしやくくと喰ひ始めぬ、

「御覽よ、常ちやん、萬事これだもの、これが針の筵に坐ッて砂利を嚙むんだとさ、ほゝゝゝ」

「眞實ねエ、どうして、かういふ暢氣な人になれるんだらう。だから妾、口惜しいんだよ」

「いくら口惜しがっても無効、この様子で何が徹へるもんかね、いふ事と、する事と、すツかり反對だから」

「反對だツて、あんまり反對過ぎるからねエ、おや、まだ、これで貴君、五はい目ですよ」

「稻田さん、朝御飯ばかりでなく、お晝飯も差上げますよ」

稻田一作、飯茶碗の上より半面を現はして目を剥き出しぬ、

「喧しいなア此奴等ア、黙ッて給仕しろ、嗅アの前で食ッて来て、また妾の前で食ひ直す奴たア違ッてるぞ、蜆ツ貝のやうな茶碗で五はい六はい何だ、これぢやア味噌汁が足りない、おかはり、おかはり」

藝妓の時も今も同じ名の歌を其まゝに川合うた、小常だけは小の字を取ッて杉本つね、お歌お常、この兩人に左右より殆ど繼子扱ひの給仕されながら、平氣に悠々と朝飯を食ひ終りし稻田一作、やうく箸を置いて自己が胸を撫で下しぬ、

「や、女といふものア實に口喧しい蒼蠅いもんだね、大抵な奴は胸が塞がッて飯も汁も胃袋へ落着かないぜ、流石の乃公も最後の一杯だけ差控へたくらるだ」

兩人おもはず顔を見合せぬ、

「あら、まア、あれで最終の一杯を差控へたんだとき、呆れるぢやアないか、ねエ常ちやん」

「眞實だよ、あゝ喧しく言はれて、あれだけ無事に食べる人だもの、もし黙ッて居て御覽、朝ッぱらから暢氣に構へて、どんな贅澤を言ひ出すかも知れやアしない」

「しかし常ちやん、この人を此後、どうしたもんだらうね、別に外へ運び出すところ

もないから、やはり此ま、當分、妾の家へ預かつて置いた方が宜かアないかね」
 「さうねエ、妾の方へ引取るのが當然だが、それぢやア却つて萬事の都合も悪いし、
 第一また氣が咎めて、いけないから御迷惑でも、さうして置いて貰へば安心さ、い
 くら外見は野暮に出来て居ても、まさか妾の兄様で、引き入れて置ける品物でもな
 いからねエ」

「ぢやア當分、たしかに預かつて置かうね、妾が預かれば根が他人だから、立派に旦那へも明して置ける人だもの」

「どうかね、さう願ひたいワ、着物や小遣は妾の方から運ぶとして」

「なアに着物や小遣も入るもんかね、なまじツか、そんな事をするよと本人、ますく、
 好い氣になつて何處へ飛び出すか知れやアしない、やはり着て來た自分の洗濯物で
 澤山さ、あれさへ着せて置けば宜いよ、すぐ常ぢやンは弱くなるからいけない、か

ういふ人にはね、なるべく邪慳に強く當らないと、また嚙んで吐き出すやうな目に
 逢はされるよ」

「だツて、それぢやアあんまり酷いもの、こゝの旦那に對しても妾、何だか肩身が狭
 くツて氣恥づかしいよ」

「おや、もう常ぢやん、でれてるよ何故、さうだらう、まア何處が宜くツて、さうなる
 ンだらうねエ」

壁に背を凭せ兩手を組んで兩眼を閉ぢながら二人の談話を聞きし稻田一作、自己みづ
 から自己を嘲る如く、おもはず満面を皺めて一種異様の沈痛なる顔色を呈しぬ、

「噫この稻田も衰へたりだ、いつの間にか估券が下ツて、女の玩弄物にされるやうな
 男になツたかい」

さくや否、お歌お常の兩人また躍起となりて小膝を押し出しぬ、

「おや、稻田さん、不足らしく、どうして估券が下りましたの、失禮ながら貴君ア何處へ往つても、かう女に持てる方ですか、妾等の目では估券が上つたやうに思はれますよ」

「眞實よ、いくら自惚にも程度のおつたものよ、女の玩弄物にされるなんて、まあずう／＼しい、よく言へた事、妾こそ、さんざ貴君の玩弄物になつたんですよ、加之も玩弄物にされた後を、メチャ／＼に踏み潰されて仕舞つてさ」

一作、ます／＼面を皺めて片手を宙に打振りぬ、

「や、さういはれて見ると、一言もないがね、そりやア汝達兩人の目分量から割り出した乃公だよ、これでも外の秤り目に掛けて見ろ、案外づつしりと重量のある男だぜ、は、は、は、其奴を、かはいさうに、いや妾の方へ預かるとか、いや此方へ引取るとか、さう手軽く扱はれる物品ぢやアないよ、第一また汝達の立場から考へても、

あまり善くない料簡だ、以前は兎も角も現在、人の所有になつて居ながら、夢にして仕舞つた昔馴染の乃公に入らざる餘計な世話を仕過ぎぢやア其人に對して濟むまい、乃公の身に取つては、昨日途中で逢つて、昨夜一夜、久しぶりの絹夜具に包まれて、今朝この通り兩人の給仕で、うんと美味いものを食やアもう澤山だ、憎まれ口は利くもんの、實アしみ／＼と身に沁みて有難いよ、金を掴んで蒔いた今日の客を明日に叩き出しても、さのみ不思議のない薄情家業の藝妓が、三年前の迷惑かけた野郎で、加之も見ろ影なく落魄れた乃公に、これほどの待遇振、お世辭でない、眞實、感心してるよ、しかし感心も此邊の感心で止めて置いてくれ、この上また感心を仕過ぎるやうな事になると、雙方の不爲だよ、ね、こゝまでの親切は、乃公も無事な男で受けられるが、諸これ以上、いよく／＼深入の親切に出喰はしちやア危険だ、つまり人間といふ奴ア圖に乗つて調子づく動物だから、ある程度を越して親切

を盡されると實に脆く弱いもんだからなア、は、は、は、折角の稲田一作を今更、海鼠にするなア慘酷だ、なるなと言ッても、さうなれば、すぐ海鼠のやうになる乃公だよ、は、は、は、どうか、この邊で助けて貰ひたい、まア何は儲置いて、よく乃公の面を見る、面の出来工合を、いくら好奇心でも全體この面が女の氣に入るかい、面で男は取らないと、かりに言ッたところで、その外に何の取得がある乃公だ、古往今來、苟くも女の世話になる面形は、眞逆こんなもンぢやア無からう、汝達兩人は、どうかしてるぜ、あらためて見直してくれ」

ぬツと兩人の前に差出す面相、なるほど本人自白の通り苟くも女に好かる、筈はなけれど、その大膽に無遠慮なるところ、憎いほど猶更ら却ッて一種の男に出来たる奴なり、

女に嫌はれて無理心中でもする奴の目より見れば、稲田一作といふ男、いかにも冥加知らずの没情漢なれど、本人の身を取ッては落ちたりと雖も破れたりと雖も一個の丈夫兒、主なき花に戯れし三年前は兎も角、わざと今日この廣い世の中に何を苦しんでか馬鹿々々しい、もはや人の所有となりし女を偷むほどの我にあらずと、流石に情は情として一入さらに深く汲みながら、さて頑として飽くまで動かぬ面魂

「また餘計な悪まれ口を叩くやうだがね、いつまで世話になッても同じこッたよ、長居は無用、そろくこの邊で御遠慮を申した方が宜からう、しかし考へて見ると濟まないね、幸ひ、もう正午に近いらしい、どうだい、お名残に晝飯だけ戴いて行かうか」

お常は物も得いはず、たゞ呆れて恨めしげに其顔を打守る耳朶へ、お歌そツと口を寄せて何をか私語けば、俄に顰める眉を開き微笑を浮べながら、いそくと慌たゞしく

立ち去りぬ、

「おい、おい、平和に願ひたいね、また妙な入智慧をされちやア困るぜ、さうでなくツても彼奴ア少々、昔からの一本調子で、逆上性に出來てるからね、危険だよ、全體、どんな毒を注射したんだい」

お歌は平氣に振り返りぬ、

「どんな毒でも薬でも宜いぢやアありませんか、もう貴君に用はないんですよ、行くなら行くで、さツさと何處へでも御勝手次第お出かけなさい、常ちやん、常ちやんは急に思ひ出した用が出来て歸りましたのさ、お氣の毒さま、今更氣になりますか、やはり貴君でも、ほ、ほ、ほ」

「なアに別段、氣にもならないがね、たゞ歸りようと歸しようとの間に何か變な耳打をして、妙な工合だツたぜ、は、は、は、時に午飯は」

「よくまあ、この中で暢氣に、そんな催促が出来ますねエ、お待ちなさい、時刻が來れば上げますよ」

「時刻が來なくツても聊か早めて貰ひたい、前途を急ぐよ」

「前途ツて、どこかへ行く確實ながあるんですの」

「確實ながあれば、ゆるく出るよ、的がないから急ぐんだ」

「稻田さん、よほど貴君ア世間普通と變ツて居ますねエ」

「乃公が變ツてるんでない、世間の奴等が變ツてるんだ、や、變ツてるといへば、うツかりして居たよ、あまり朝から立續けに饒舌り過ぎて、は、は、は、まだ前夜のま、だ、この襦衣は定めて旦的の着古したらうが、借りたものア返すよ、ところで乃公の着て來た晴着は、どこにある、出してくれ」

「晴衣、あれが貴君の晴着ですか」

「今日の境遇に於ける稻田一作の晴着だ、いくら絹でも錦でも襦衣の借着ぢやア歩けないからなア」

「なるほど、そりやア御道理ですな、しかし貴君の着物は、ありませんよ」

「ない、どうして無い」

「常ちやんが今、持ッて歸りましたよ」

「えッ、彼女、持ッて歸ッたア、おい／＼酷い事するない、あれを盗まれちやア裸體だよ」

「酷いも何もありませんか、裸體は貴君の御勝手、さア妾の貸した其襦衣を脱いで下さい、もう貴君と常ちやんの事は知りませんからね、雙方で直談判が宜いでせう、さア今、すぐ眼前で脱いで下さい」

「おい、こら、待て」

「待てません、かうなれば妾も意地ですからね、一時も待たれません」

「やア計略に落ちた」

女といふもの、平生は何の角もなく滑かに優しけれど、ある一方に向へば脇目も觸らぬ幕地の勢ひ手負猪の如く、とても眞正面より男の組み付けるものでなし、

加之も案外の智慧を吹き出し度胸を据ゑて、實は捨身の自棄に来る怖ろしさ、つまり見た目の美はしき金魚と一般、煮ても焼いても喰へぬものなり、

その女も女、尋常の處女が人の妻となりし女でなく、うき世の裏と表を自由自在に通ひ馴れし藝妓あがりの女二人のため内外相應じて攻め落されし稻田一作、怒るに怒れず泣くに泣かれず、自己が着物は奪ひ去られ借着の襦衣は剥ぎ取られて、出るに出不れず寝るに寝られぬ白晝の丸裸體、腕を組んで面を皺めながら化け損ねたる狸の如く惘然と座敷の中央に行儀よく坐りぬ、

「噫その愚には及ぶべからず、とても叶はない、どうかしてくれ、ふざけるにも程度があるよ、これぢやア流石の乃公も百計こゝに盡きて、まるった、動く事が出来ない、第一あの着物の袂に金が這入ッてるぜ金が」

わざと其場を立退いて、また意地わるき襖越の聲、

「どうかしろッて、常ちやんが持つて歸ッたんですもの、どうも今更ら妾にしようがありませんよ、つい貴君この横町ですからね、御自分で取りに往らッしやい、もし腹が立ッて暴れるなら御遠慮なく暴れても宜しいのよ、すぐ妾は遁け出しますから、また金々ッて全體、幾何ほど入れて置いたんですよ、いッそ交番へでも訴へた方が早いでせう」

「さう窘めてくれるない、乃公がための軍用金だ、大枚二圓三十錢、しかし金より何より裸體ぢやア困る、この横町でも何でも此まゝ門口へ出られるかい、決して暴れ

ないよ、おとなしく此通り神妙に往生してるからね、どうか助けてくれ、馬鹿々々しいが笑ッて居れないよ、進退こゝに谷ッて實ア半泣だ」

「おや、まだ貴君、半分しか泣けないんですか」

「丸泣々々、あまり悲しくッて涙も聲も出ないよ」

「ほゝゝ、稻田さん、貴君ア徳な方ねエ、普通大抵の色男ぢやア逆も、さういふ念の入ッた面白い目には逢はれませんよ、此後、どんな御出世なさるか知らないが、これこそ貴君の生涯に自慢の出来る、お笑ひ草ですもの、ほゝゝ、だがね稻田さん、お寒ければ、そら、其戸袋に今朝の夜具がありません、まア暫時その夜具を被ッて在らッしやい、そのうち常ちやんが何とか沙汰をして来るでせう、どうして貴君を氣強く捨て、置ける女ですかね、きッと今に心配して來ますよ、もし妾なら其儘風でも引かして熱でも出さして一旦、病人にして仕舞ッてから、動きの取れないやう

に押へ付ける工夫はありますがね、あの女ぢやア無効、いくら泣いても恨んでも根が貴君、でれくと溶けるんだもの、ほゝゝゝ」

「どうか無効で置いてくれ、この上さういふ物凄いい計略を出されて堪るもんかい、もし彼女一人なら何でもなかつたに、とんでもない軍師が付いたから閉口だ、男の敵と違つて女の業師は道具外れを打つて来るから困るよ、もう仕方がない、しかし降参はしないぞ、花々しく討死だ、討死だ、畜生、死際に驚愕するな」

日は西に傾きし黄昏時、妾宅の門前に護謨輪の自動車、いふまでもない所有主の御入來、はや植込の隙間より見ゆる奥二階の障子越に電燈の光輝、程なく下女が駈け出して近所の料理屋より運び込む品々、をりくは幽かに漏るゝ忍び駒の爪弾、本宅の妻子以外これなくば當世紳士といはれぬ世の中になりぬ、

年輩五十六七、そろく六十近き老の身ながら、でツぷりと肥え太りし赤ら顔、額際より禿け上りて頭の毛は薄けれど、鼻下に白髪の高き八字髭、床柱に背を持たせて淺黄縮緬の座蒲團に腰を埋めし大胡坐、その面前に一入の艶を増す浴後の美人お歌の愛敬、いかにも旦那の目には不老不死の妙薬なれど、實は生命を削り取る浮世の大飽なり、

「今日は大變お早う御坐いました事、どちらかの御歸途」

「なアに、わざくやツて來たのさ、どうだ親切があるだらう、ほゝゝゝ」

「あら、此方から申し上げる事まで、よくまアお世話が行届きますねエ、御苦勞さま、ほゝゝゝ」

「老年の故かも知れないが、段々と苦勞性が増して來るね、不思議に此頃は人の世話を、したくなつて困る」

「こゝでは幾何、どんな不思議も苦勞も宜う御坐いますが、もし外で貴君、妙な、お世話をなさると承知いたしませんよ」

「いや、こゝの不思議も不思議に依りけりだ、今、乃公が這入ッて来る時、ちらと見たが、階下の八疊に居るなア誰だ、丸裸で夜具を着て座敷の中央に目を剥きながら坐ッてる人間、全體、ありやア何だい」

「ほゝゝゝあれ、ほゝゝゝあれですか、御覽なすッて」

「見たよ、見たが何だよ、まさか化物でもあるまいが、正體の分らない、をかした變な奴だな」

「ほゝゝゝあのまゝあれで何と見えませう、理由を御存じなく只、ちよいと御覽あそばしたところで、どういふ御鑑定か、ほゝゝゝもし中れば妾、先日お願ひ申した帯地を買ッて戴かなくッても宜う御坐いますから、御褒美に此方から差上げませう、

ほゝゝゝ」

「ばゝ馬鹿な、この年になるが乃公は、あゝいふ奴を鑑定した事はないよ、どういふ理由で此家へ今日、あんなものが出来上ッたか、その理由を言へ理由を」

「ほゝゝゝあれで貴君、實は大變な色男なんですよ」

「色男、誰の」

「誰のでも、そりやア後で分りますが、色男も色男、世間普通のザラにある尋常の色男では御坐いませんよ、眞實の女殺しに生れて来た怖ろしい凄い色男ですもの、それを妾、いろくくと面白い理由があッて、生捕ッて置きましたの、ほゝゝゝあの色男、着物を着せると直ぐに飛び出して遁けますからね、わざと丸裸にしてあるんですの、ほゝゝゝ」

化物も近來は時勢に連れて、も少し氣の利いた化物の出る世の中に、丸裸のまゝ夜具

を着て目を剥きながら座敷の中央に坐り込む奴あれが色男かと、今まで眉を顰めし旦那の方より俄に笑ひ出せば、今まで立續けに笑ひ顔れしお歌が却つて俄の眞面目顔、「眞實ですよ、色の生白い優形で、春畫草紙の殿様めいた色男なら別段、不思議も何もありませんが、油断大敵、あれで案外の色男に出来てるから怖ろしいんですよ、かゝった女は逆も助かりませんもの」

「や、ちよいと待った、全體その女ア誰だ、あの化物に取つて喰はれた女ア誰だい、第一また此家へは何の因縁あつて、どういふ理由で、彼奴あゝしてるんだ」

「かはいさうに、その取つて喰はれた女と云ふのは、ほゝゝゝ御安心あそばせ、妾では御坐いませんよ、しかし妾だつて、もし一度かゝった事があれば助からないかも知れませんが、まア運が善くつて僥倖、かうして無事に居られますもの實は、たゞびく危い事も御坐いましたよ、ほゝゝゝ」

「ふざけるな、此奴」

「だつて貴君、さうですもの、現在、さうなつてる女が」

「さア其女は、誰だといふんだ」

「常ちやん、あの小常ですよ、この横町に居る」

「ふむん、小常、あれが、それか、あの化物に、はてね、ふむん妙だなア」

「不思議でせう」

「不思議だな、以前の事は委しく知らないが、をりく遊びに来る現在の小常は、さういふ筈の女でないよ、ありやア外觀によらない堅いところのある伶俐女だぜ」

「どういふもんか、さういふ筈でない小常が、昔も今も相變らず、さうですよ、その伶俐女が貴君、あの夜具の化物にかゝると見て居られませんの、たゞもう理由もなく、でれくと溶けて仕舞つて」

「いよく不思議だね、ところで、あの化物を汝どうして此家へ置くんだ、何故また彼奴が丸裸で階下の座敷に夜具を着てるんだい」

「ほ、ほ、實は昨日、妾が途中で目ツけて、無理に引ツ張ツて来たのを幸ひ今朝あの小常が貴君、着てるものを剥いで歸りましたの、あゝして置けば當分どこへ遁ける事も出来まいといふ策略で、つまり色男の生擒、ほ、ほ、勿論、あのくらの酷い目に逢はして置かないと貴君、女の一人や二人が泣いて騒いだって、どこを風が吹くといふ調子で、有難いとも嬉しいとも思はない、すう／＼しい横着な色男ですからね」

「おい／＼本人の小常は兎も角、いくら身體に暇があつて、する事がないにしろ、汝までさういふ馬鹿な真似をしては不可ンよ、また小常だつて獨身女ぢやアなし、友達甲斐に意見してやるのが當然だ、そいつを好い氣になつて騒ぐ奴があるかい、も

し間違でも出来たらどうする、しかし聞いて見ると面白い男だね、何といふ名だ」

「稲田といふんですよ、稲田一作、たしか二十七でせう」

「二十七、稲田一作、どうだらう、乃公が逢つて見ようかね、何とか言つて汝、こゝへ連れて上れよ」

稲田一作、わざと横にもならず、丸裸のまま、座敷の中央に夜具の化物然と坐り込んでをり／＼額越に天井を見上げながら何か思案の腕を組む折しも、そろりと襖を開けてお歌の聲、

「おや稲田さん、まだ貴君、そのまゝ坐つて在らツしやるの」

「立ツて歩けるかい」

「なるほど、さうですなエ、ほ、ほ、ほ、それぢやア立ツて歩けませんわ」

「ふざけるな、なるほどの出ようが遅いわい、今更ら氣が付いたやうに、さうですな
 エもないもんだ、第一また夜具といふ奴、いくら綿が這入ッて居てもな、どたく
 と重ッ苦しいばかりで素肌には却ッて寒いぞ、まして今年は暖氣の後れた春の夕方
 だ、身體中に毛穴が立ッてらア」

「だッて常ちやんが貴君、いけないですよ、もう來さうな筈ぢやアありませんか、
 ぐづく何をしてゐるんでせう、じれツたい」

「彼奴も彼奴だが、よほど汝の方が罪は深いぞ、考へて見ろ、どんな怨恨のある彼女
 だッて、まさか眼前で乃公の着てる着物を無理に剥いちやア行くまい、幸ひ襯衣の
 借着があつたからだ、そいつを汝、あとで否應なしに引ッ剥ぐたア實に酷い仕方だ
 ぞ、今、二階に來てる旦那といふなア高利貸ぢやアないかね、どうしても汝ア世間
 普通の旦那を持てる女でない、高利貸の氣に入りさうな妾だ」

「あら、まア、稻田さん、あんまりです事ねエ」

「な、何が、あんまりだ、さア喧嘩なら來い、かうなれば乃公も自棄だ、女を相手に
 馬鹿けてるが、こゝまで念入に馬鹿け過ぎると世の中の事も随分、面白くなるも
 だ、は、は、は、」

「怖い事、ぢやア一切、妾が悪かつたとして」

「悪いと思やア潔く悪いと言ッて仕舞へ、としては何だ」

「では悪う御坐いましたね」

「ねの字は入らない」

「稻田さん、冗談ぢやアありませんよ、大抵にして下さい」

「無論、本氣の沙汰だ」

「口では迎も貴君に叶ひませんわ」

「口で叶はないから手をかけて、またこの夜具でも剥ぎに来やアがッたんだな畜生」
 「どうして貴君、かうなると女は弱い損なもんですよ、剥ぐどころですか、この通り
 謝ッた上、兎も角も旦那の着替を持って来ますからね、そして稻田さん、お談話か
 たぐお二階へ入らッしやいな、實は今ちよいと貴君の事を言ッたんですの、する
 と旦那がね、そりやア是非、逢ッて見たいと」

「旦那の着替、失禮千萬な事を申し上げるない、寝る時に襯衣がないから借りてやッ
 たんだ、起きて居て他人の着替を借りるかい、もし乃公に逢ひたけりやア此ま逢
 はう」

「そんな貴君、意地の悪い事を、いはないでさ」

「いや、いふぞ、さんざ今まで窘められた御禮に、これからが乃公の出る幕だ、ぐづ
 ぐづ吐しやア旦那的の横ッ面を二撃三撃ほかりと喰はしてやるから、さう思へ、なア

に金は無くツても腕力はあるぞ」

二階の床柱を背にして悠然たる胡坐の膝を座蒲團に埋め、金と電燈と禿頭の三拍子を
 光らせながら、お歌の昇り来るを待ち兼ねて苦笑ひの體、この老爺いかにも妾宅の旦那
 那に出来たり、

「どうだい、夜具の化物、いよく来るかね」

「ほ、ほ、来るには来ますが、手数が掛ッて困りますよ、すぐ容易に貴君、ウンと言
 はないんですもの」

「何故、さう手数が掛ルんだ」

「實は私が悪かつたので、さんざ今朝から窘め抜いた上、あの化物にして仕舞ッたん
 ですから、その返報でせうよ、自棄半分の意地に文句を並べ出して、いくら何と言

ツても素肌の夜着を放しませんの、ほ、ほ、ほあのまゝで來ると強情を張り通して」
 「は、は、はなかく、面白い男だ、そりやア却って面白いよ、かまはない其まゝで呼べよ」

「だって貴君、初對面の貴君に、あんまりですもの」

「なアに乃公さへ承知すりやア、それで宜いんだ」

「それだけなら宜いんですが、妾、まだ危険でなりませんの、大體が世間普通の調子に外れて、よほど無遠慮に、すう／＼しく暢氣に出來て居りますから、時と場合で、どんな事を言ひ出すか分らない人ですよ」

「まるで汝の身に掛つた人間を引合すやうだね、もし一方に小常といふ相手が無けりやア乃公に取って油斷のならない男だ、は、は、は」

「たとひ一方に相手が居ても、女といふものには魔のさす事が御坐いますよ、妾は大

丈夫ですが、外では御用心あそばせ、ほ、ほ、ほ」

笑ひながら階下へ降りし間もなく、やがて妾宅住居の廣からぬ梯子段を、みしり／＼と昇り來る足音、加之も中段より四邊かまはぬ俄の大聲、

「おい／＼さう無理に押上げちやア困るよ、夜着の裾が引ツか、ツてる、痛い、そりや乃公の足だ」

今年こゝに二十七の稲田一作、駄々ツ兒の如く叫びながら、やう／＼階下より押上げられし體を見れば、例の丸裸に大夜着の化物、そのまゝ眞面目に坐り込んで慙慙に初對面の挨拶、

「猿も衣裳といふ諺を最も適切に用ひらるゝ今日、初めて御目にかゝるものが御覽の通り、かういふ馬鹿けきツた體で、實に汗顔の至極ですが、まさか最初からの丸裸ぢやアないんです、つまり家の中の追剝に出ツ喰はした理由で、こんな優しい顔

をしながら現在、ここに居る貴君の愛妾が其發起人ですぜ、は、は、は

いかなる美服に作り立て、も、いかなる最良目に見ても、美男の部には入れ難き稲田一作、丸裸に袖夜着を着て莞爾ともせず無愛敬の面を突き出しながら、膝小僧を揃へて平氣に坐り込みし體、これが色男かと今更ら呆れて思はず吹き出しぬ、

「は、は、はいや實は今も貴君の事を聞いて、さんざ妾を吐つたのですよ、以前は以前、いくらお心易いにせよ、あまり法に外れて怪しからんこつてすからねエ、は、は、はしかし面白、失禮ながら御年齢の割合に頗る灰汁の脱けたところがありますよ、當時の若い人間に逆も、それだけの思ひ切つた藝は出来ない、は、は、は、どうしても一種の快男兒だ、なるほど、それぢやア案外 人の知らない懷中に女殺しの白刃も持つて居らるゝでせうよ、は、は、は」

「ところが御覽の通り、丸裸に剥かれて仕舞つて、何一個、刃物のない男ですよ、聊

か浮世に對する軍用金として二圓三十錢を持つて居りましたがね、それも貴君、憐れむべし着物と同時に捲き上げられて、は、は、は、もはや身に寸鐵も帯びませ

「やれ、その二圓三十錢まで、そいつア猶更ら重ねぐの災難ですな、は、は、は、だごまア時の不運と諦めて、どうです今夜ア愉快に飲まうぢやアありませんか、いくら交際深い友達でも容易に連れて來ない此かくれ家で、かう面白く出逢つたのは何かの縁でせう、さア樂に打解けてね、は、は、は、御都合で當分ここに居られても宜しいよ、妾から聞かれたかも知れんが、ある二三の銀行に關係を持つてる木村周藏といふものです」

「木村、は、ア銀行家の木村さんですか、お目にかゝるのは初対面ですが、をり、新聞紙上で御姓名を承ります、ふむ、その木村さんですか」

「いや、その木村といはれるほどの者ではありませんが、他の金を預かって多少、經濟界の端くれに居りますから、なか／＼氣骨が折れますよ、その上、この老年ですからね、今日の世間には濟まないが、兎も角、かういふ隠れ穴で息を次ぎますのさ、は／＼」

「息を、お次ぎなさるのか、また息を切らされるのか、その邊は少々、問題ですなア、は／＼」

「これは恐れ入った、なか／＼鋭い斬込みやうだ、やはり油断のならない刃物を持つて居られる」

「なアに裸武者、まさかの時は仕方がないから爪の端で引ッ搔くぐらるの藝です、とても敵を殺し得ませんよ、まづ出來たところで痛くない蚯蚓ですな」

「うまい、よほど巧い呼吸がある、時に稻田さん、甚だ突然ですが貴君ア全體、どこ

の學校から出られたンです、また目下どういふ目的で何をなさるンですな」

「なるほど、いかにも今日は總て新舊の分岐點だ、まづ凡そ四十以上の人間は必ず、どこの生國ですかと問はれ、三十以下の人間は皆、どこの學校かと問はれるやうですなエ、一見、その容貌と風采に世間の取捨あるべき筈だ、如何です木村さん、その生れた國も言はず出た學校も言はず、また過去の經歷も語らず前途の目的も明さず、此ま／＼この丸裸に夜着を着て貴君の眼前に坐ッてる稻田一作、もしこれを賣り込む日には木村さん、時價の相場上、幾何に買ッて下さるでせうな、決して押賣は致しません、ちよいと試みに値を付けて見て下さい」

「うか／＼と調子外れの馬鹿口を吐く中に相手の咽喉首を覗いて、どこやら不意に物凄い尖端の出る奴なり、

二階には金の光りの木村周藏と素寒貧の稲田一作、お歌は俄に階下より呼び降されてお常と聲を潜めながら私語きぬ、

「常ちや遅かつた事ねエ、もう少し氣を利かして、早く来てくれ、ば宜いにさ、困ったよ」

「すみませんね、どうも普通でない、あゝいふ人だから、また後で、お困りだらうとは察して居たんですがね、すぐ引返して来ちやア、あんまり内兜を見透かされると思つて、ほゝゝゝお氣の毒さま、その上また呼びに遣つた呉服屋が自烈ツたい、なかゝゝ急に來ないんですもの」

「おや、もう呉服屋を呼びに遣つて、恍いねエ、それで内兜を見透かされない覺悟なの、ほゝゝゝ」

「だって、まさか、あれを、あのまゝ着せて置けないもの、是非とも今夜中に仕立て

てくれと堅く念を押して置いたから、遅くも明日の正午までには出来るでせう」

「出来ますよ、大出来で御坐います、もし出来なければ今後一切、出入を差止めるといふ手巖しい仰せ渡されだらうからねエ、ほゝゝゝしかし常ちやん全く困つたよ、不意に旦那が來てさ、あの夜着の化物は何だといふ理由で、仕方がないから萬事、うちあけて仕舞つたのさ、ついでに汝さんの目も鼻もなくデレ／＼してる工合まで委しく話したよ」

「あら、まア、酷い事」

「何が酷いもんかね、妾こそ酷い目に逢つたよ、知ってる通り氣の軽い旦那だからね、そりやア面白い男だ、二階へ上げろといふ始末で、さアといふ場合になると常ちやん、例の流だらう、うんと自棄に腰を下してさ、動かばこそ、なかゝゝ容易に上らないで、いやもう、さんざ意地わるく復仇をされたよ、いくら何だつて初対面だも

の、考へて御覽、下手な茶番狂言ぢやアなし、あの丸裸で夜着を着たまんま押出せるもんかね」

「丸裸で夜着、どうして」

「ほ、ほなるほど、まだ常ちやんは知らなかつたんだねエ、實は汝さんが着物を持つて歸つた後で、すぐ何處へか飛び出しさうな形勢だつたからね、早速の早業、貸した襦衣も剥いで仕舞つて丸裸にしたのさ、だが風でも引かしちやアいけないから袖夜着を一枚」

「かはいさうに、ことし二十七の大の男を丸裸は、あんまりだワ、さう粗末に取扱はれるンなら妾、まだ外に何とか工夫もあつたにさ」

「おやく、折角の芳志が通らないでさ、どっちへ向いても妾、あやまるンかねエ、つまらない」

「なアに別段、お世話になつた上、さう贅澤をいふ理由ぢやアないンですが、お猿だつて家の内で飼はれる日には、ちやんくぐらる着せて置くに人間の丸裸は」

「だからさ、自分の役不足も持ち出さず、謝つてるぢやアないかねエ、どこまで稻田さんに溶けてるンだらう、見苦しい、少しは確乎おしよ」

「いちく、あの人に妾、さう弱く見えるンだらうか」

「だらうで濟むかね、盲目だつて、さう見えるよ」

「口惜しいねエ、しかし本人、丸裸で、どうして居ました」

「それこそ御覽に入れたかつたね、あの丸裸で夜具を着て目を剥いて、この座敷の中央に膝ツ小僧を並べて腕を組みながら、ジツと無言に黄昏方まで坐り込んだ工合、晝にも描けないね、ほ、ほ、だが逆も尋常の人で出来ないところがあるよ、あゝいふ人は自分が馬鹿にされて居て、いつの間にか相手を馬鹿にするんだからね、胴よ

り肝が太いとは眞實、稻田さんのこつたよ、あの度胸で組み付くんだもの、今も現に二階で旦那と談話の調子、無遠慮の中に何ともいへない自然の愛敬があつて、上にならず下にならず、うまいねエ」

「ですからさ、惚れた女の妾が弱くなるのは當然でせう」

「知らないよ」

「ほ、ほ、どうしたら宜からう」

「も少し顔の造作を引緊めてお笑ひよ、見ツともない」

「だツて、かうなるんだもの」

「常ちやん、擲るよ」

過去に屬する生國も家系も經歷も學歷も一切これを語らず、前途に屬する希望も目的

も方法も手段も一切これを語らず、只こゝに丸裸のまゝ、夜具を着て坐り込みし稻田一作の價值、もし時價の相場に賣るとすれば、幾何に買ツて下さるかと問はれて、流石の世事に長けし木村周藏も、おもはず眉を蹙めて反り返りぬ、

「ふう、なるほど、いや實に面白い、随分この木村も多年の間、いろんな人間に接して種々の問題に出會ツたが、かういふ唐突の奇問を受けたのは始めてです、しかし妙だ、學校の卒業證書、有力家の紹介狀、知己朋友の情實的、其他あらゆる御他力に依ツて來るものゝ多い今日、寧ろ感服しましたね、ふう、なるほど、こりやア面白い」

「は、は、何が面白いもんですか、實質の半以上は廣告で通る世の中、たとひ一場の座興にせよ、なるべく飾るのが人間の當然です、それを丸裸で夜具の化物、は、は、しかし此邊で賣ツて置けば後で不足をいはれる氣遣ひなし、また買ふ方にも間違ひ

はありますまいよ、幾何です、縁日の植木と違つて掛價は申しません、思ふ存分に付けて見て下さい」

「左様さね、すぐ今こゝで幾何といはれては少々、困りますが、失禮ながら兎も角、買つて置いて損のない品といふだけの事は、自分の経験上たしかに認められますな」

「あとの苦情が面倒だ、御損のないところで願ひませう」

「は、は、は、しかし稲田さん、さう急に及ばない、もう少し念を入れて品物を拜見した上、こゝと思つた値を付けませう、まアそれまでの間は、如何です一杯、この通り何も食ふものはありませんが」

「ぢやア御遠慮なく戴きませう、いくら飲んでも食つても、まさか木村さんこの御馳走の代價を差引かれる理由ではないでせうな、は、は、は」

「いや、料理代は引きませんが、現に今この階下へ來たらしい、あの小常の恍惚は、

きつと差引きますよ」

「そりやア酷だ、ありやア木村さん、あれ同志で、雙方お互のこつたから、差引なしにして貰ひたい、加之も事實の上からいへば貴君こそ脊負ひ込むべき責任はありますが、目下この稲田に於ける彼奴は、さらに何の關係もないんですからねエ、つまり昨夜來こゝでうけた迷惑料だけ高く買つて貰つて宜い筈ですよ、はッはッはッ」

忽ち階下より癡走つたお歌の聲、

「稲田さん、さうは貴君うまく行きませんよ、さア常ちやんお上り、かまはないよ」

お歌お常の二女が階下より聲を揃へて笑ひながら昇り來る足音に、一作おもはず振り返りぬ、

「やア待つた、待つたく、氣の毒だが暫く階下に居つて貰ひたい、木村さんどうぞ上けずに置いて下さい、折角かう眞面目になりかゝつたところへ、あの二人に來られ

ちやア破壊的になりますよ、何、お給仕に出る、いや給仕には及ばないぞ、もし木村さんの給仕なら拙者が勤める、お銚子の代り目は下女で澤山だ」

丸裸の夜具を捻ぢて頻りに防禦線を張れば、興に入りし木村周藏また首を伸ばして制しぬ、

「眞實だ、ちよいと今こゝで談話の仕かけてる事があるから、手を鳴らすまで昇ッて來ては、いけない」

「嚴命々々、謹ンで階下に居れ、女の出る幕ぢやアない、さア木村さん只今の一件、早く値を付けて下さい、眼前に夜具の化物然たる稻田一作、このまゝで幾何に踏め
ます」

「はゝゝゝ手に入るか入らないか、それは兎も角、まづ千二百圓ぐらゐで買ひたいも
ンですな」

「千二百圓、まさか日給とは思ひませんが、無遠慮に露骨に承ります、年俸ですか
月給ですか」

「知らざア半分値といふ事もあり、また目下その人物よりも第一に差當ッて其仕事がありませ
ンから、廉價いかも知れないが年俸ですな」

「千二百圓の年俸、月に百圓ですな」

「左様、それも無期限では少々困りますが、稻田さん、もし實際その邊で御承知なら一場の座談でなく、まづ二年間、試験的に買入れますよ、どうです、女に着物を判
がれて丸裸の色男になるよりは、月に百圓で當分、働いた方が面白いでせう」

「なるほど、ちよいと試みに相場の先走りでも張る氣で、銀行家の木村さんに取ッては宜い御慰みだ、丸ツきり損したところで高の知れた二千四百圓を捨てたものにして、二年間この稻田を使ッて見ようといふ理由ですな、はゝゝゝ」

「なアに強ち、さういふ理由でもありませんが、もし出来る相談なら」

「よろしい、手を拍って負けませうが木村さん、二年間といふ期限を極められては聊か酷い」

「だが今こゝで二年以上は到底、お約束に應じられませんよ、それからは後の事としてね」

「いや、以上を願ひたいのでない、以下にして欲しいんです」

「は、ア、二年以下ですか」

「あまり一月も何だから、せいぐまア二月か三月ぐらゐるですな、それ以上の契約は此方で眞平、御免を蒙りたい、如何です木村さん、實は今日の稲田一作に百圓は入らない、十五圓の下宿料と十五圓の小遣で日に一圓づゝ月に三十圓だ、つまり六十圓で二月の間いかなる苦戦悪闘も辭せず働いて見ませうか、一番、この男を貴君の

目と手に餘った最も難中の難關に向けて御覽なさい、は、は、は、は、

銀行家中の有力者として、紳士中の粹人として、うき世の場數者として、兎も角も人に知られたる流石の木村周藏も、丸裸の稲田一作がために聊か爲て遣られたる體、されど當時流行の雅量なるものを示すは却つて茲にありとの顔色、わざと大聲に笑ひ出しぬ、

「は、は、は、ますます面白、千二百圓といふ言葉に對して年俸か月給かと問ひ返したところ、いかにも氣に入つた、また二年間といふ約束に對して不足らしい工合だから、それ以上かと思へば何ぞ圖らんで、せいぐ二月か三月にして欲しいと出たところ、いよく以て案外だ、加之も座談を離れて事實の契約となれば、月に百圓は入らない、十五圓の下宿料と十五圓の小遣で一個月三十圓、わづか六十圓で最も悪戦苦闘を要する難中の難關に向けて見ろとは、自信抱負、殆ど今日の若い人に求め

られない、ぢやア稻田さん、他日は他日、別問題は別問題として、當分その事に約束しましたぜ」

「承知いたしました、着るものと食ふものとさへあれば、どんな敵に向けられても、さう脆く凹垂れませんよ、つまり他のためでない、實ア自分の腕驗しだ、は、は、は、は、」

「こりやア意外の掘出物をした」

「黄金は地中の産物です、いかに價値があつても光輝があつても、掘り出してくれる人が無くツちやア世に出られませんからなア」

「掘出々々、いよく掘出だ」

「掘り出され掘り出され、いよく掘り出されませう、は、は、は、」

木村周藏、俄に高く叫びぬ、

「おい／＼用は濟んだから二女とも昇つて來い、昇つて來て此裸武者を思ふ存分に窘

めろ、もし手に餘ツたら乃公も加勢してやるぞ、實に愉快だ、稻田さん今夜ア夜明しで飲まう」

稻田一作、兩手に確と夜具の襟を搔き合しての苦笑ひ、

「四面楚歌の聲だ、かうなりやア仕方がない、さア矢でも鐵砲でも持つて來い、ついでに銚子の熱いところも五六本、ひツさけて來いよ、御馳走も亦これツきりで遠慮するに及ばないぞ、どし／＼運べ、差支なきやア二人とも昔とツた杵柄だ、三味線も荷いで來いよ、はッはッはッはッ」

二階座敷の中央に坐を構へながら夜具に包まれし大胡坐、前に木村周藏を置き、兩脇に二女を侍らせて、左手に盃、右手に箸、飲むはく、食ふは食ふは、出るほどの肴は見る間に平けて、むしや／＼と食ひ、酌ぐほどの酒は咽喉を鳴らしてがぶ／＼と飲み、久しぶりの空腹に俄の酒肴満々、とろり陶然と酔ひし體、

「もう食へない、もう飲めない、これで十分だ、近來さらに試した事はないが、さて人間の腹といふものは案外小さいモンですな、は、は、は、實は初めて御意を得た木村さんの面前だから聊か差控へて世間體に殊勝らしく御遠慮を申し上げる筈ですが今夜この坐かぎりの事でない、將來ます、長く深く相變らず御交際を願ふため、わざと張り裂けるほど胃袋を擴げて思ふ存分に食ひ酔ひました、は、は、は、全體、近ごろの奴等ア交際の道を知らない、その初對面に入らざる餘計な外觀を飾り過ぎるから到底その終局を全うすること難しだ、ついでには稻田一作この丸裸に夜具を着た此醜態で、かう無遠慮に酔ッぱらった邊を御覽に入れて置けば大丈夫でせう、もはや人間交際場裡の不用意と不謹慎を遺憾なく暴露して此上に間違ひはありませんから御安心下さい、や、時にお歌の方、何故、さう意地の悪い顔をして睨むんだよ、實は木村さんと約束した事があつて、當分、御厄介になる筈だからね、どうか今後あ

らためて敵意を翻し穩和に親切に女らしく優しく頼むぜ、これまでの如く君に形勢不穩の状を示されちア、君を愛する旦那様に對しての乃公だ、自然その間が妙な工合になるよ、はッはッはッ」
例の高調子に刻むが如く笑ひながら、此方を振り返る夜着の襟、するりと迂り落ちて片肌を脱げば、見るに見兼ねし小常、そつと背後より打掛けし其手を強く邪慳に拂ひ退けぬ、

「よせッ、な、何をするんだ、考へて見ろ、素肌に上せた夜具が重くツて締める帯がないから動けば自然に脱けるんだ、脱けたところで不思議も無けりやア誰も咎めな
いぞ、また掛けたところで今更ら乃公の估券が上ると思ツてるか、この馬鹿者め、
ふざけた事をする女だ、護謨人形のやうに伸びたり縮んだりせずと汝の分相應、おとなしく土人形のやうに黙ッて其處に坐ツてろ、をかしく變に生きた人間の眞似を

すると承知しないぞ」

嚙んで吐き出す如く罵られても、憐れむべし小常は物も得いはず、そのまゝ顔を反けて涙ぐむ風情に、お歌おもはず小膝を進めながら一作の手首を握りぬ、

「稻田さん、そりやア貴君、冗談でせうね、もし冗談でないとなれば、いくら酔って在らしつても妾、旦那の前ですが妾、このまゝ聞いて居りませんよ、常ちやん、齒痒いねエ、なぜ稻田さんに、さうだらう」

木村周藏も手に持てる盃を坐に置きながら、おもはず眉を蹙めぬ、

「そりやア酷い、あまり残酷だ」

一作、ちらと額越の目元に小常を見返りながら、くすくすと笑ひぬ、

「なアに實ア昔の可愛さ餘ッて今の憎さが百倍、人の所有物になつて腹が立つからですよ、もし以前のまゝなら舐めるやうにしまさアね、はゝゝ、深いは怨恨、浅いは

情縁、あゝ酔った、思ひぞ出づるだ、畜生そこに居てくれない、歸れ」

小常は猶更ら泣き、木村は腕を組み、お歌は差俯きながら獨言、

「あれだもの、あの術で遣られるのさ、わざと云ふ理由でもなからうが、罪な人に出來てる事ねエ」

面白い、このまゝ夜明しに飲み明さうといふ筈ながら、あまり興に入り過ぎて木村周藏まづ酔ひ潰れ、流石の稻田一作も久しぶりの空腹に飲むだけ飲んで、いつしか醉顔朦朧の體となりぬ、

無論お歌は木村の介抱人として二階に居残り、これ幸ひに稻田の介抱人は小常の役目なれど、わざと座を外して何處へ行きしやら、二人の下女に助けられて、やうく梯子段を無事に降りしが、設けの寢床へも入らず、起きて居てさへ夜具に包まれし奴、

ころりと其まゝ疊の上に横たはりぬ、
わづか疊一枚を這ひ出せば安樂に寢床の上なれど、この厄介物、もはや二人の下女が
手に合はず、途中に石佛の倒れし如く、そのまゝ其處に捨てられながら前後も知らず
高躰、

四方たゞ聞として音なく、ふけ渡る深夜の酔中、夢うつゝの耳に入る聲あり、

「稻田さん、稻田さん」

一作、なほ残る酒氣を帯びながら、ふと目を覺せば、片隅へ吊り寄せし電燈の球を新聞紙に包みて、ほつと薄闇き我枕頭に坐せる人影、

「誰だ、誰だい」

「妾」

一作、ぬつと首を擡げぬ、

「ふう、小常だな」

「はい」

「どうして今頃まで、ぐづくこゝに居るんだ」

「今夜、歸り損ねましたから」

「歸り損ねた、なぜ歸り損ねるんだ、きけば遠くもない、この横町ぢやないか」

「あまり近いから、つい油断しましてね、もし遠ければ、かう遅くならないうちに氣が付きまますよ」

首だけ擡げし一作、そろく片手を突き立て、半身を起しぬ、

「おい、小常、間違つてくれちやア困るぜ、汝の身は無論の事、乃公も今ア大切な瀬戸だ、この瀬戸さへ乗つ越せば兎も角も港が見えさうだからね、こゝで汝に櫓楫を折られちやア稻田一作、また元の捨小舟となつて、方角の知れない沖の荒浪へ逆戻

りだ」

「妾、何も、わざく、その櫓楫を折りには来ませんよ」

「わざく、折りに来る筈は無いだらうが、乃公も人間だ、淺ましい凡夫だよ、汝に來られちやア自然に折れるさ、強ち、その港に生涯の錨を卸す氣でもないがね、久しく浪風に揉まれて、さんざ勞れ切った乃公だ、せめて一度は安心の出来るところで、碇泊して見たいよ」

「かういへば、あゝいふで、昔から貴君ア口が巧いから逆も叶ひませんが、何故この妾が、さう蒼蠅く邪魔になるんでせう、いやなら嫌で言葉に艶を持たせず、いッそのこと、妾の急所でも蹴るなり踏むなり一氣呵成に殺して下されば宜いにさ、貴君ア全く罪の深い人ですよ」

「わからない女だなア、他人の妾を乃公が自由に殺せるかい」

「稻田さん、もし他人の妾を廢めたら貴君、きツと自由に妾を殺して下さるんですか」

稻田一作、むくりと起き直りぬ」

「おい、小常、こゝは汝お互のためだ、よく聞いてくれよ、今更ら古臭い文句めいた事をいふやうだが、まゝならねばこそ浮世なれで、おもはぬ方角に身を寄せるのが人の運命だ、こいつを新しい事實に照らせば、最も緻密なる科學的作用に組み立てた汽車でさへ、レールを外して轉覆する事があるぢやアないか、ね、まして人間の最も粗漏に出來た藝妓稼業の汝と世間普通の鑄型に合はない乃公だ、かうなるのが當然で、もしあのまゝ無事に今日まで添ひ遂けて居りやア大間違ひだ、まさか意氣地なく新聞の三種に浮名を流して引取人のない情死もすまいが、汝の身體に傷害が付くか乃公の一身が立たなくなるか、どうせ無理に無理を重ねて來る曉だ、ろくな事アないぜ、それを思やア三年前の汝と乃公が病み煩ひもせず今こゝで、互

に達者な顔を見るだけでも雙方の僥倖だ、遠い他國へ別れたまんま生涯、風の便りも無くなつたつて誰に不足が、いへるかね、食つたり着たりする事には時と場合の勝手次第で、いくら贅澤しても宜いが、この人間の運命といふ奴に向つて、あまり好きな贅澤を言ひ出すと不可ない、とんでもない目に逢つて、二度と再び世の中へ出られないぜ、分つたか」

小常は顔に袖を當て、返答もせず、たゞ小兒の如く首を振りぬ、

「おい、分つたらう、分らない筈はない、こゝまで言へば分る筈だ、第一まア考へて見ろ、この夜深に、この乃公が酔つて寝た枕頭へ、その汝が、さういふ工合で來てるところを小常、もし汝の旦那が見たら、どうする」

「どうしたつて、どうなつたつて構はないから、妾こゝを、旦那に見られたいんですよウ」

「何、見られたい、見られりやア無事で濟まないぞ、いくら今ア潔白でも、言譯があるかい」

「言譯なんか、しますもんかね、無事で濟まないのが妾の希望ですよ」

今まで顔を掩うて涙の聲を漏らせし小常、その袖を取り身を振向くや否、新聞紙に包める電燈の光輝ほつと薄闇き中より、いきくと張り切る目元の物凄さ、わけて美人の思ひ込んだる一念に瞬目もせず、暫し無言のまゝ男の顔を打守りぬ、

「稻田さん、諦めて下さい、すみませんが、何かの因果でせう、妾といふ悪縁の深い女に、どこまでも纏ひ付かれた貴君ですよ」

流石の稻田一作、ぞつと思はず總身に寒く感じぬ、

夜は明けたり、酔は醒めたり、この夜の明けるまで、この酔の醒めるまで、深夜酔中

の稲田一作と情緒纏綿の小常が間に如何なる秘密の含まれしやら、たゞ知るものは二人を此處に引き寄せし戀の神と運命の神の仕業なり、
 夜は明けしが二階も階下も前夜の夢まだ枕を離れぬ頃、一作まづ起きて内より戸を明け、そつと人知れず小常を送り出せし後、また再び元の如く夜具に包まれて身を横たへぬ、

やがて下女の起き出でし臺所の物音を聞くや否、いつにない事お歌の早起、そろく二階より降り来る足音に、わざと空寝入の一作、や、此奴め、だしぬけの不意に襲ひ込んで寢首を搔く軍略だな、
 果して顔も洗はず襯衣のまゝに窺ひ寄り、襖を細目に引開けて差覗きし甲斐もなく、案に相違の體、

「おや、稲田さん、貴君、お一人」

ふざけるな、そんな甘い術に乗るかと稲田一作、寢返りもせぬ寢惚聲、

「やア酔った、前夜は馬鹿に酔った、あれから二階は定めて面白く雙方お互に交情よく介抱を仕合つたらうが、今夜に限った事ぢやアなし少しは遠慮するが宜い、その階下で、今年二十七の生きた男が膝小僧を抱いて寢たんだぞ、せめて酔醒の水でも世話する下女ぐらゐる付けて置きさうなものだなア」

「稲田さん、すみませんね」

「や、これは失禮、お歌の方、そこに居られたのか」

「妾は今、こゝへ降りて来たばかりですが、前夜から貴君お一人、はてね、來てる人がある筈ですがねエ」

「身に添った影法師の外、只お一人この座敷へ引摺り卸されて、自然に酒の酔は出て來る、食ったもので腹は張る、随分お苦しく寢かされたよ、お察し下さい」

「變です事」

「は、何が變だ、時に木村さん、まだかね」

「今に起きませうが、妾、どう考へても合點の行かない事がありますよ、かういふ筈ぢやアなかつたに」

「どういふ筈か知らないが、兎も角も今日からア稻田一作、夜具の化物ぢやア居られなくなつたよ、是非とも門外へ出られるやうにして貰ひたいもんだ、こゝの家で赤裸にされたんだからなア」

「お言葉に及びません、そりやア稻田さん、きつと今日は、どツからか出來ますよ」

「有難い、どこから出來てくるにしろ、無事に門外へ出て歩けるやうになりやア押しも踏まれもしない男だ、流石の乃公も丸裸ぢやア動けないよ、さて誰が、どういふ衣裳を着せてくれるかな」

前夜の今朝は九時過、はや十時に近きころ、やうく二階より木村周藏の手が鳴り始めぬ、

手が鳴るや否、お歌は急いで何をか下女に命じながら其まゝ昇り行きぬ、

「あら、今お目覚めですか」

「やア、よく寝たぞ、いつにない寝たよ、は、時に稻田ア、どうした、起きたかね」

「あの通り酔つたんですから、逆も今朝は頭も上るまいと思つて居ましたに案外早く起きて、けろりとして居りますよ」

「どこか根に強いところのある奴だ、そして例の小常は、どうなつたい」

「それが貴君、をかしいんですよ、あの夜深に、あゝ酔つて居た、その枕頭で小常は一生懸命ですもの、石佛だつて金佛だつて無事に濟む筈はないに貴君、憎らしいぢ

やアありませんか、すましきッて妾への不足、この二階の下で今年二十七の生きた男一人を膝小僧抱寝の捨置は酷いといふ不足、ほ、ほ、ほ、何でも今朝、早アく人の知らない曉方に歸したらしい工合ですよ」

「ふう、なか／＼油断のない奴だな、萬事その調子だらう、面白い、しかし例の丸裸ぢやア困るね、實は今日から乃公の方に入用の男だ、急に何か着せてやらすばなるまい、全體どういふものが本人の氣に入るだらう、和服にしる洋服にしる、やはり人間相應の風俗に合はないと不可ないよ、汝から聞いて見るが宜いね」

「なアに聞くに及びませんよ、それに付いて幸ひ前夜は雨だったか風だったか、確に知れる事があるんですから、まア今日は一日あのみで」

折しも階下より昇り来る下女、今朝の新聞を差出しながら、お歌への小聲、

「横町の杉本さんから只今、何だか大きな風呂敷包がまゐりました、これをお客様へ

渡してくれと置いて歸りましたが、どう致しませう」

お歌、おもはず小膝を叩きぬ、

「兎も角その風呂敷包をね、そツと此處へ持つてお出で」

やがて下女が運びし風呂敷を解けば、とても一人の仕立職では半日一夜に出来ぬ品々、上着下着の二枚袷に羽織も同じ大島紬、袖は白縮緬に胴は英ネルの長襦袢、キヤラコ地の紺足袋、薄メリヤスの猿股、わざと目立たぬ鼠縮緬の兵兒帯、半麻のハンカチーフを四つに畳みて其中へ十圓紙幣三枚、別に包みしものを何ぞと見れば、幅廣き桐柩の直穿下駄まで添へし優しさ哀れさ、お歌、ほろりと涙を流しながら俄の大聲、

「稲田さん、稲田さん、すぐ上ツて来て下さい、贅澤に夜具なんか着て来ると承知しませんよ、まッ裸で、まる裸ですよ」

妾宅に宿りし朝は却つて早く、遅くも八時頃には必ず出で行くべき木村周藏、今日に限って午飯を過せし後、やうく立出でしが、その出際に稻田一作への言置、午後二時より三時までの間に銀行へ来るべしとの事、
 久しぶりの湯に入りて、小常が情の衣類を身に纏ひながら、いはれぬ先のお歌を振り返りし一作の苦笑ひ、

「どうだい、似合ッたらうな」

「稻田さん、お猿にも衣裳とは、よくいつた事ですネエ」

「猿にも衣裳は酷い、同じ口で、馬士にも衣裳といふ事があるから、せめて人間の部に入れてくれよ」

「冗談は措いて眞實、妙なモンですネエ稻田さん、それで少しは男振が上りましたよ、ほ、ほ、ほ」

「は、ア、當然でなく妙なモンで、少しぐらゐるより上らないかね」

「無論ですよ、大體の品が貴君、あまり感心の出来ない品ですもの、ほ、ほ、ほしかし稻田さん、さうして身に纏ッた着心地は、まさか腹の立つモンぢやアないでせうね」

「なアに別段、嬉しくもないよ、つまり不足をいはれながら送ッて来る心根が可哀さうだから、ふびんに思ッて着てやるのさ、人の妾に着物を着せて貰ッて調子の狂ふ乃公ぢやないぜ、やはり境遇は境遇、有難迷惑のない自家一流の丸洗ひでね、ぱりぱりと糊の強い洗濯物が」

「身分相應でせう」

「いや、着心地が宜いんだ」

「ほ、ほ、善くツても悪くツても、一旦、さう身に付けて着て仕舞ッた以上は稻田さん、もう無効ですよ、いくら威張ッても無効、お氣の毒ですが其まゝ無事で済みま

センよ、いふだけ野暮になる苦勞人の貴君でも、こゝは確乎に念を押して置きますよ、現在の證據人は妾、後日、どんな事があつても動かしませんよ、なるほど人の妾に着物を着せて貰つて調子の狂ふ貴君ぢやアないでせうが、人の妾に着せて貰つただけの事は忘れず覚えて居なさるでせうねエ」

「はゝゝ、なかく、皮肉に出るね、彼女も案外、計略のある軍師が付いてるわい、や、時にもう一時だ、木村さんと約束した二時に間がない、出陣の武者振ひがして来た、どりや膝栗毛に鞭つて、そろく〜と押出すべいか」

内幸町に魏々たる鐵骨石造の關東銀行、その應接所に腕を組んで椅子に身を持たせし稲田一作、妾宅の旦那たる木村周藏と銀行の頭取たる木村周藏との相違、どれほど人間の區別があるかと、片頬の微笑を含みながら待ち受けぬ、

妾宅での木村周藏は兎も角、あらためて關東銀行の頭取たる木村周藏に逢へば、なるほど經濟界の一部に其名を知らるゝだけの老爺、もとより生涯の目的を託するに足らねど、まづ今日の窮境を踏み出すべき初步としては、さのみ不足のない相手と見て取りし稲田一作、差當り約束の下宿料十五圓と小遣の十五圓と別に二十圓の雜費、合して五十圓を受取りながら其日は其まゝ立出でぬ、

關東銀行を立出でし一作、衣服は今の境遇に過ぎたるほどの贅澤なり、懷中に小常よりの三十圓と今日の五十圓と八十圓の金あり、久しく空腹を抱へて日比谷公園のロハ臺に新聞の賣子と喧嘩せし身には意外の幸福、深夜の濡鼠となりて巡查の家に三日の食客的を極め込みし身には案外の運命、加之も世に出る端緒を得しは唐突に逢うた福の神、内々そつと人知れぬ美人の情に慕はるゝは南瓜の當り年、いかな男も聊か上氣せて調子の狂ふべき筈ながら、此奴こゝに飄然として依然たる稲田一作、折柄の夕飯頃に

料理屋の門口も見返らず、わざと無駄足を踏んで殊更に探し歩かず、其まゝ眞一文字に電車へ乗り込むや否、神田錦町の停留場より最も近き便利の下宿屋に入りぬ、その下宿屋に高等の二字を冠せしが、高等と下等に關せず、たゞ十五圓を抛け出して一月分の先拂ひ、二階の六疊一室に入りて忽ち手を打ち鳴らし、夕飯を呼んで腹を肥せし後、また立出でて一閑張の机と實用的の文具一切を面倒なき勸工場より求め來り、夜具は損料借、新聞だけは下宿屋住居の身分に稀なる八種の注文、いよくこゝに蟻居して過去は過去に葬り新なる將來の第一歩に踏み入りぬ、馬鹿けて饒舌る時は諧謔笑聲、四邊かまはぬ無遠慮の男なれど、眞面目に腕を組みし時は沈思黙考、殆ど木彫の達磨に等しき無愛敬、わけて下宿屋住居となりし後の稻田一作、用なければ、つくねンとして内に坐り込み、用あれば飄然として外に立出で、出入ともに一種の變り物を以て目せられぬ、

されど流石に青書生でない證據、どこやらに角の取れしところありて、自己が部屋を受持つ下女に五圓紙幣一枚、

「おい、この通りの無精もんで、猶更ら他より世話になる事が多いからね、半襟の一筋も買ってくれ、なか／＼下宿屋の奉公人には惜しい女振だ、うツかり袖を引かれちやア不可ないぜ、間違ひなく勤めて好い亭主を持ってよ、はゝゝゝ」

まさか酒の上でもないらしい木村周藏の口より二年間といふ約束を、わざと二箇月に縮めて、どう見込んだか月に百圓といふ相場を十五圓の下宿料と十五圓の小遣を合した三十圓の實費に切り出せし稻田一作、いかにも案外の正直に殊勝らしき體なれど、實は人知れぬ鼻頭の小皺に冷笑うて曰く、金は天下の金だ手腕で取るぞ、わづか一銀行の頭取風情に乃公の價値を極められて堪るもんか、

されど兎も角も一月の間は命令者と服従者の關係上、關東銀行に木村を訪うて一禮を述べし後、神田錦町の宿所を届け置きしが、その夕方、妾宅お歌の許より送り來りし白毛布の大包、開けば例の丸裸に纏うた見覚えの袖夜着と同じ縞の敷蒲團と新らしき坊主枕、貸した氣か、くれた氣か、但し長らく湯にも入らざりし素肌の垢に汚れたと吐す意味か、いづれにせよ、下宿屋の損料物よりは寢心地の宜い筈と、紙の端に鉛筆の受取を認めて持ち込みし車夫に渡しぬ、

着物は小常、夜具はお歌、下宿料と小遣は木村の手より出る金、こゝに以上三人の寄附を取り去れば、やはり元の木阿彌、どうしても當分この乃公は裸一貫の男ぢやと笑ひ出しぬ、

無頓着、無遠慮、稻田一作の如き暢氣者の常として十中の八九、何事も不規律に流れ易く、不節調に傾き易く、人の約束を河童の屁とも心得ず、たとひ急使を馳せても直

ぐには來ない奴と思ひの外、何ぞ圖らん、この大風に灰を吹き揚ぐるが如き茫漠漢、不思議に用意周到なる緻密の物堅いところあり、朝は必ず午前八時に關東銀行へ出頭し、木村周藏に對うて何か御用はありませんかとの口上、いよく無いと聞けば其まま悠然と立去れど、雨にも風にも一日も缺いた事なく、もし木村の遅刻せし時は出るまで待ち受け、もし出でざる時は銀行の退けるまで身を退かず、木村周藏また一個の思慮ある老爺、凡そ二十日あまりの間は毎日この稻田に逢ひながら、いまだ會て一言の用を命ぜし事なし、

流石の稻田一作も、おもはず眉を擡めし心のうち、この阿爺め、乃公を何に用ひる心算だらう、

木村周藏も腕を組みし心のうち、稻田といふ奴、なか／＼油断はならないが、よほど面白い見込のある奴だ、

木村周藏と稲田一作、こゝ暫時は無言のまゝ、雙方より額越に睨み合の體となりぬ、

神田の錦町に下宿屋住居の後、二十日あまりの間、さらに影も見せざりし稲田一作、いかなる風に吹かれてか、ぶらりと木村の妾宅お歌の方へ入り來りぬ、

「やア御無沙汰しました」

入口より四邊かまはぬ例の高調子、下女の取次も待たず、ある程度までは自己の妾宅に等しい無遠慮、すつと其まゝ、打通りてお歌が居室へ唐突の客、

「過日は、いろくくと厄介をかけて済みません、また早速夜具を有難う、おかげで損料を助かつた、のみならず第一に寢心地が宜くつて、加之も我ためには忘るべからざる記念物だ、あのまゝ、貰つて置きますぜ」

もとより我戀でも情人でもなく、また逢へば口に毒ありて腹の立つ男ながら、さて何

とやら心に待ち受けしお歌、ふしぎに他人のやうでなし、

「おや稲田さん、貴君に聞かうと思つて居ましたの、神田の錦町は東京から全體、どの位の里数があるんです、今日は汽車ですか汽船ですか」

「はゝゝゝそろゝまた始まつたよ、別に來る用がないから、つい御機嫌を伺ひ損ねた理由さ、はゝゝゝ」

「では今日、どういふ御用で、入らしつたんです」

「いや、實は今日も用なしだが、さても其後さるほどに三週間だ、ちよいと濟まないやうな氣がしてね、ふらくくと遣つて來たが、久しぶりで何か奢つて貰ひたいもんだ、寢かして喰はして日に五十錢づつだから無論、不足もいへないが、乾燥無味の下宿屋住居ぢやア逆も身體に膏ツ氣が上らない、今日は鰻か鳥か牛肉、鰻は潮を呑んだ大串、鳥は雜物澤山、牛はヒレかロースに限る、この近所に種の善い天ふらの

美味しいのは無からうか、酒は入らない飯で結構、食後は水菓子よりもサイダーか平野水の方が簡便で胸が空くよ」

お歌、無言のまま、額越の目を光らして、つくつく一作の顔を打守れど、本人さらに平氣の顔色、石地藏の頭を蚊が刺すほどの感じも無いらしい體、

「同じ御馳走になるなら、どうか早幕に願ひたい」

「稻田さん、たゞそれだけの御用で久しぶりに遠方のところを、わざわざ無理に来て下さいましたの、痛み入ります事ねエ」

「は、は、は、さういはれては少々、挨拶に困る」

「憚りさま、其方より此方で挨拶に困りますよ」

「まあ宜いぢやアないか、高が人間一疋の食物だ、苟くも銀行の親方を手鞠に取って掌上に翻弄するといへば語弊があるやうだが、兎も角もデレて来る旦那を自由自

在にする身で、いちくさう經濟眼の皮肉的に出るもんぢやアない、いたるところ立派な男が生活難を叫ぶ今日、無職業の一人として日夜この贅澤に暮してるんだもの、何等か罪亡しをしないと冥加が悪い、あまり運の善い女が吝な料簡を出すと終焉が善くないぜ、年貢納めは田地ばかりぢやア無いらしい」

「稻田さん、まあ貴君は何といふ、憎い口を聞く人でせう、それぢやア奢りたくツても奢れませんよ、誰が奢るもんですか馬鹿々々しい、犬でも魚の骨で尾を振りまさアね」

「や、しまつた、聊か口が過ぎたやうだね」

「聊か過ぎたもないモンですよ、まあよく、それで世間の人承知して無事に通しますねエ」

「なアに、これでも世間ぢやア案外、うまい調子があるから、かうは出ないさ、しか

し、どういふもんか、こゝへ來ると氣儘が言ひたくなる、なぜだらう自分でも分らない、うツかり同胞のやうな氣がしてね」

「あら、まア怖い事、そんな同胞を持つて堪るもんですかね、ほゝゝゝ」

「兎も角も文句は後で聞くとして、さし當り今日は是非とも奢ッて貰はう、他日は知らず現在の境遇、こゝで美味しいものを食はなきやア外で食ふところがないんだ、堂々たる一個の男兒、わづか食ふ物ぐらゐで人の世話になツちやア差引勘定の合はない理由だが、此方に損の行くだけ食はせる方に取ツちやア實に恩の着せ時だよ、諺に曰く麥飯で鯉を釣り鰕で鯛を釣るとは、かういふ場合だね」

流石のお歌も呆れ返ッて身を反しながら、じつと其顔を打守りつゝ、頻りに無言の小首を振り動かしぬ、

「はゝア、嫌かね」

「なアに、さうぢやアないの、眞實、稻田さん、貴君には感心しますよ、まアどうして、さう平氣に暢氣に、ずうくしくなれるンでせう、いくら押の強いもんだッて晝日中、面と人に對ッて、まさか、そこまで厚顔しくは出られませんからねエ」

「ふウ、さう押が強く、ずうくしく見えるかなア」
「見えるかなアぢやありませんよ、少しは考へて御覽なさい、相手も血の氣の通ッてる人間ですぜ、時と場合で蟲の居どころが悪いと無事に濟みませんよ、しかし稻田さん、貴君には自然と備はツた妙な徳がありますね、世の中には随分、氣の毒なほど下から出て、お世辭のありツたけを並べながら、人に嫌はれるものもあります貴君ア絶えず無遠慮に憎まれ口を聞きながら、その割合に怒られもせず嫌はれないのが不思議ですなエ」

「そこだ、そゝ其處だよ、世間の奴等は口と腹が反對で、心にもない世辭愛敬を振り

蒔くが、この稲田は口に毒があつて腹に罪がない、ちよいと人に對つて無遠慮のやうだが、そりやア相手に差支の無いかぎりで、いまだ會て大體の禮を失した事が無い、また自他の間に事々物々の程度を辨へてるから、いくら押が強く、ずうくしく見えても自己のために他人を害せない、さらに嘘といふ事を吐かないから、よし其場で愛敬を缺いても後で見下けられるやうな賤しいところがない、馬鹿けて居ながら案外その實は馬鹿けて居らず、萬事、ふざけて居るやうで大に眞面目な點あり圖に乗つて闇雲に調子づくやうで踏み止まる分限を承知して居る、つまり男に出来るよ、これで人の知らない親切氣があるから、關係あつたものア堪らないさ、はッはッはッ」

「おやまア、大變な效能書ですねエ、しかし人の知らない其親切氣で、關係あつた誰が堪らないんです」

「や、また一ツた、取消々々」

「稲田さん、御注文通り奢つてあげますから、今日は妾の承知するまで歸しませんよ」

酒は入らない飯で結構、注文は野暮なれど膏氣の脱けた下宿屋腹、鰻か鳥か牛肉か天ぷらといふ一作の要求に應じて、お歌は笑ひながら二人の下女を四方へ走らせ、鰻は二人前、鳥は三人前、牛肉が四人前、天ぷら二人前、ビール五本、正宗三本、以上の品を一時に持ち出しぬ、

「さア稲田さん、御注文通り奢りましたよ、一品も残さず平らけて下さい」
 流石の一作、おもはず反身になつて目を剥き出しぬ、

「や、こいつア驚いた、こりやア大變だ、無論、一人前では足りないが品は何か一種で澤山だつたに、口で並べて言つたゞけの食物を悉く眼前へ突き出されちやア恐

れるよ、いくら喰ひぬけだつて見たばかりで腹が張るよ、冗談ぢやアない、意地にも程度のあつたもんだ、第一また酒は入らないと最初から断つて置いたぜ」

「ほ、貴君にも似合はない何ですよう、うかくすると大蛇のやうに人でも呑む貴君が、これッばかりの食物で恐れる筈がありますかね、今更ら餘計な體裁を作らずと召上れ」

「思召は有難いが逆も召上れない、いくら體裁なしに戴いても無効だよ、考へて見てください、これが一人の胃袋へ納まるかね、まだ生命は大切だ、なるほど人間は儲置き時と場合で天地も丸呑みにする乃公だが、そりやア氣で呑むんだ、こりやア實際この口の中へ入れるんだからなア」

「納つても納らなくつても、貴君の御注文だから是非、貴君に喫べて貰はないと、これが辭になつて今後、妾の意地が立ちませんよ」

「いよく意地で食はすんだね」

「さうですとも、誰が心底から喜んで貴君に御馳走するもんですかね、この中に毒を仕込んでないのが僥倖で、まだ運の強いんですよ」

「こりやア酷い、ますく驚いた、過日は裸體責め、今日は喰物責め、何故さう乃公に怨恨を抱くんだらう、こゝまで執念深く残酷な取扱ひを受ける覺えはない筈だがねエ」

「覺えのない筈があるもんですか、妾が妹のやうに思つてる常ちやんを、かはいさうに、あゝいふ目に逢はして、まだ飽き足らないか此ごろは貴君うまく妾の旦那を手の内へ丸め込んで仕舞つたでせう、毎日々々これといふ用もないに、わざく時間も違へず銀行の方へ御出勤ですことねエ、ほ、どこへ向いても怖い人だこと」

「おい、世の中には差別のあるもんで、さう味噌も糞も同一物にしては不可ないよ、

用のある無いに係らず報酬の多少に關せず、乃至また相手の如何によらず徳義上の責任といふものがあるからね、つまり今、かう馴れ馴れしう君のやうな絶世の美人に接して殆ど自他の隔意ないほど心易く近づいてるが、さて袖も引かず手も握らず、どうだ豪いもンだらう、實は握らしてくれても乃公の方で御免だよ、はッはッはッはどうしても叶はぬ口惜し紛れに、お歌、おもはず我を忘れて一作の膝頭を捻れば、五尺五寸の大男、わざと俄に小兒の如き大聲を張り上げて叫び出しぬ、

「いたい、痛い、助けてくれエ」

ますく馬鹿けたる大聲を發しながら、鰻と鳥と牛肉と天ぷら以上合計十一人前さらに注文外のビール五本と正宗三本を眼前に置いて、俄に何をか感慨の體、

「人間の運命なるものは實に妙な出来合だ、全體この運といふ奴、人間の思ふ通り自由自在になツちやア面白くないが、儲また此奴、あんまり人間を馬鹿にして翻弄

する時があるから癩に觸るよ、現に今この御馳走だ、一月以前の稻田一作は歸るに家なく進む的なく、ふわくと迷った人魂の如く日比谷公園へ入り込んで三日越しの空腹をロハ臺に横へて居た男だぜ、それが僅一月の後、さのみ働きもせず金も擱まなないに兎も角も柔らかい著物を著て、たとひ他人の所有物でも氣の利いた美人を面前に置いて、かう不意討の食物責めにされるたア、夢にも知らなだね、殆ど意想外だ、つまり人間には人間の分限相應、五合榊に一升は盛れず二升榊に一斗は溢れる理由で、それぐ定った程度はあるが、その程度中で必ず一度は一ぱいになるか空になるか、盛衰の兩極端、頂上に達する運命と奈落に沈む運命を持つてゐるらしいわい、聞けば年が年中、満身に腹を膨らした事のない乞食ですら、その乞食中に一度は必ず食物を貰ひ過ぎて勿體ないと知りながら、捨てるほどの全盛期があるさうだ、して見ると乃公の食物に於ける運命の頂上は今だね、もはや

是以上の食運は無ささうだよ、とても再び来さうでないと思へば聊か心細いね、さりとして十一人前は今こゝで一時に腹に這入らずさ、同じ事で毎日一種づつ割賦に御馳走してくれ、ば宜いに、しかし出された以上、みすく、残念でも仕方がない、鰻と鳥と牛肉と天ぶらを半人前の割合で等分に食って見よう、半人前としても合計十人前だから五人半前に當る勘定だが、まさか腹の皮も裂けまい、實は世間普通と違つて乃公の皮は特別製で護謨のやうな質だからね、や、無理に押込めば六七人前、這入るかも知れないよ、もし間違つて病氣でもなりやア、こゝで氣兼ねなく養生するさ、やるべし、やるべし、奮勵一番、やつつけよう、ついでに注文外の酒も飲んでくれべし、はッはッはッはッ

例の刻むが如き高笑ひ、また例の両手に箸と盃を持ち始め、一ゆり體を揺動りながら坐を構へ出せば、お歌ますく、呆れて思はず居坐を直しぬ、

「長たらしい前口上、しかし、まアよく一人で、それだけ詰らない事を立續けに饒舌れますねエ」

「なアに、わざく、饒舌るンでない、こりやア食ふ前の腹減らしだ」

なるほど世間普通と違つて腹の皮の護謨張に等しい稲田一作、ビール五本のうち二本、正宗三本のうち二本、こりりと横に倒して、まづ三人前の鳥を半分ほど平らけ、わけ好物の天ぶらは二人前で不足らしい顔色、さらに二人前の鰻を七分まで食ひ盡して今や四人前の牛肉に箸を下さんとする時、お歌の内通に忍び来りし小常、そツと襖を開けて不意に其場へ現はれぬ、

「や、伏兵が現はれたぞ、また挾撃にする計略だな」

小常は物もいはず、お歌に會釋せし目を其ま、轉じて、じろりと一作の顔を打守りしが、はッと俄に慌て、箸とる手首を掴みぬ、

「あら、まア大變、とんでもない貴君、およしなさいよ」

「よせエ、何故およしなさいだ、乃公が口で喰ッて乃公が腹へ詰め込むんだ、とんでもないとは汝のこつた、退れ、黙ッて唐突に来る女があるかい」

「いくら貴君の口でも腹でも、そりやア鰻と牛肉ぢやアありませんかねエ、此人は」

「いかにも、鰻と牛肉だ、それが全體、どうしたい、何が不思議だ」

女の叶はぬ時に爪で引ッ搔くといふ藝あり、小常は無理に箸を奪ひ取ッて、もはや一作に目もくれず、お歌に對ッて恨めしけの顔、

「お歌さん、あんまりです事、少しは考へて貰ひたいワ、かういふ人だもの、出せば出るだけ我身知らず何でも食べるでせうが、鰻と牛肉」

「おや、常ちやん、鰻と牛肉を出したのが悪いの」

「だッて鰻に牛肉は酸の物より酷い禁物で、おそろしい食ひ合せですもの、鰻を喫べ

て牛肉を喫べると、すぐ中毒るんですよウ、人に聞いたばかりでなく、現在、妾が二三度も見て知ッてるんですからさ、第一また貴君も貴君だよ、餓鬼道から出て来た亡者ではあるまいし、同じ御馳走になるなら何故一種か二種になさらないの、まア見ッともない下司張ッて並べた事、これを今日中に貴君一人で皆、お腹の中へ入れる覺悟でしたの」

意地と堪忍で箸は取れど、實は既に苦しいほど満腹の一作、この機を外さず、わざと開き直ッて目を剥き出しながら、お歌に詰め寄りぬ、

「此女のいふ事は一切、すべて取上げないが、苟くも自分の身體上に關するこつた、さア誰に頼まれたか何の怨恨か知らないが、どういふ理由で稻田一作を毒殺しかけた、殺人罪の未遂犯、加之も腹の減ッた乃公を食物で釣るとは猶更ら以ての言語道斷、けしからん、承知しないぞ、おい小常、汝も茲が料簡の極點だ、乃公に附くか、

お歌の方に附くか、敵味方の境目、度胸を据ゑて返答しろ」
 目と目で牒し合すや否、お歌は牛肉、小常は鰻、一時に奪うて其まゝ二階へ遁け昇れば、あとに取残されし一作、喰ひ過ぎし腹を撫でながら酔顔朦朧たる額越に天井を睨み上げての舌鼓

「身體に閑暇があつて物に不自由のない女等だから、ふざけ過ぎて始末に終へないわい」

二人の二階へ遁け昇りしを、これ幸ひの一作、實は食ひ過ぎて飲み過ぎて動けぬほどの重き身を、やうく這ひながら、そつと忍び出る折しも、臺所口より窺ひし番兵の下女、かくと二階へ通ずるや否、また二女もろとも慌て、降り來りぬ、

「稻田さん何處へ」

「まア貴君、さう酔つて居て危険ですよ、御覽なさい、もう日が暮れてるぢやアあり

ませんか」

左右の手を二女に取られながら、腰を立關口に下して首尾よく片足の下駄 穿けど、片足の下駄はステッキと共に履脱石より轉け落ちぬ、

「おい放せ」

「放すもんですか、妾等の目を偷んで挨拶なしに何處へ行くんです、貴君にも似合はない卑怯ですよ、常ちやんしツかり取ツ捉へてね、こんな時に平生の惚れ氣を出しちやア無効だよ、思ひ切つて邪慳に爪を立てるのさ」

「大丈夫、喰ひ遁けをするやうな人に誰が惚れるもんですか、親の仇敵と思つて掴んでますよ、もし叶はなくなれば手首へ噛み付きますワ」

左右より犬か猫の如く兩の手首を引ツ搔かれ噛み付かれて、流石の一作も苦し紛れの聲を出しぬ、

「おい、こら、馬鹿な事を、やア痛い〜」
 「ぢやア稻田さん、も一度お上りなさい、妾等が得心した上で、無事に歸してあげますから」

「それとも下宿屋で、待ッてる女があるンですか」

「ふざけるな此女等、もし酔ッて居なきやア二女とも手鞠のやうに抛け付けられるンだぞ、や、下女め、こら待て下女の畜生、奉公人の分際で客の履物を持つて遁ける女があるか、臺所から斥候面で乃公の出るのを見張ッて居た阿魔だな、月に幾何の給金か知らないが、それぢやア行末の出世が覺束ない、どうも性質の善くない女だ」
 「稻田さん、御心配に及びません、妾の使ッてる下女ですよ」

「なるほど勇將の下に弱卒なしか、は、よく揃ッた主従だが、あまり揃ひ過ぎて旦那の寢首でも搔くなよ、痛い、痛い〜今の冗談だ、やい小常、汝まで好い氣

になッて乃公を放さないね、つまり乃公を苦しめるンだな、それで汝、面白いか」

「威喝かされちやアいけないよ常ちやん、いつも其術で遣られるンだから」

「困るなア、かういふ獐猛な參謀が付いてるンだ、仕方がない、大に讓歩して、十五分か二十分の間、いや〜ながら特別の思召で逆戻りをしてやらう、しかし念を押して置くが、遅くも三十分の後には歸るぞ、今度こそ腕力に訴へても歸るぞ、宜いか、つらく〜考ふるに全體この乃公は劍難の相であるべき筈だが、こりやア案外

女難らしいわい」

いかにしても或程度まで男は女に叶はぬもの、流石の稻田一作も小常お歌の二女に悩まされて、やう〜夜の八時ごろ、わづかに一方の血路を開きつゝ喧嘩腰に遁け出しぬ、

食ひ過ぎに腹は膨れ、ふざけ過ぎて氣は重く勞れ、飲み過ぎに脚下よろ〜として春

と夏なつし行き交かふ空そらの夜風よかぜに酔顔よめがほを吹かせながら、お歌うたの妾宅せむたくを立出たちいでて半町はんちやうあまりの我背後わがうしろに人ひとの足音あしおと、何心なにこころなく振り返かへれば街燈がいとうの餘光ひかりに小當こつねの影かげ、

「や、此女こいつめ、ひよこくくまた動き出うごしたな」

「生きてますよ」

「むしろ死しんだ方が優ましだ、しかし今時分いまじぶん、どこへ行くんだ」

「どこへも行きませんよ」

「何處どこへも行ゆかない事ことがあるか、汝おまへの家うちは後の横町あとよこちやうだらう」

「後の横町あとよこちやうでも前の横町まへよこちやうでも、宜いいちやアありませんか」

「よくない」

「よくなかつても、妾わたしの勝手かつてで歩あるくんですから」

「畜生ちくしやう、乃公おれが振り返かへつて乃公おれの目めに付つく間は歩あるく事ことならない」

「だつて此このまゝ、路傍みちばたに蹲しゃがんで居をられませんよ」

「居をれなきやア家うちへ歸かへつて寢ねろ」

「まだ早はやいんですもの」

「おいく、おい、往來わうらいだぜ、白晝ひるでなくつても人ひとが通とほるぜ、何故なぜさう思慮かんがが足りな

いんだらう、馬鹿ばかな女めだなア、過日このあひだの夜ばん、あれほど言いつて聞きかしたに、まだ分わからな

いか」

「わかっていますよ、分わかつてればこそ、あのまゝ二十日はつかあまりも、じつと堪忍がまんして貴君あなた

の下宿げしゆくへ行ゆかないぢやアありませんか、しかし今夜こんやは妾わたし、どうせ神田邊かんだへんへ買物かひあに出で

ようと思おもつて居おたんですから、幸さいひ、酔よつて在いらつしやるし」

「いくら酔よつても稲田いなだ一作さくだ、女おんなの送おくり狼おほかみは入いらない、歸かへれ」

「歸かへりませんワ」

「何、歸らない」

「是非、神田の錦町まで、捨て、置けない用がありますの」

「明日に延ばせ」

「どうしても延ばされません」

「困るなア」

「困ッても困らなくツても貴君は貴君、妾は妾で、別々に歩けば差支へないでせう、無理に手を引合ッて下さいと頼むんぢやアなし、身體が觸るでもなし、他人が見れば何だか知れやアしませんよ、まして夜だもの、さう野暮に出る貴君でもなかつた筈ですがね」

「ぶつぞ」

「ぶたれても構ひません、辛抱の出来るだけは黙ッて辛抱しますが、もし出来なくな

れば大きな聲を出して、一生懸命に泣きますよ」

「どうでも勝手にしろッ」

「しますワ」

無論お歌の入智慧、こんな時に惘然して居ちやアいけないよ、家内で手に終へない男は家外で蒼蠅く窘めるに限るといふ、物凄いな軍略を授けられて猶更ら捨鉢の自棄氣味となりし小常、どこまでも執念深く付き纏うて離れねば、此方も三十六計の奥の手、逃ぐるに如かずと思へど例の食ひ過ぎに身は重く脚下よろくの一作、蛇に覘はれたる蛙の如し、

「畜生、まだ躡いて来るな」

「貴君に躡いて行くんぢやアありませんよ、今いふ通り、是非とも今夜はね、神田の錦町に捨て、置けない大切の用があるんですもの」

「馬鹿、世の中には随分、いろんな馬鹿もあるが汝の馬鹿ア、よほど御丁寧に念が入
ツてるぜ」

「どうせ念の入った馬鹿ですよ、馬鹿でも大抵の馬鹿ぢやア貴君のやうな人に毒々し
い、こゝまで酷い事をいはれながら、わざわざ誰が夜途を躡けて来るもンですか、
もし怜悯なら世間の妾氣質で何不自由なく養って貰って加之も可愛がってくれる旦那
那一人を神妙に守って居ますよ、もし放蕩をすれば旦那の鼻毛を讀んで男ッ振の好
い俳優か藝人を買ひますよ、つまらない、考へて見ると我ながら不思議ですワ、な
ぜ妾は貴君のやうな面憎い邪慳な人に、かうなるンでせう」

「何かの罰だい」

「さうでせうねエ、さうでなくって妾、かうなる筈が」

「ちよッ、黙って歩け」

「あら、うれしい事、黙ってさへ歩けば、躡いて往っても宜いンですな」

「や、汝ばかりでない、乃公も、何かの罰だらう、さうでなくって汝のやうな女に、

かう付き纏はれる筈が」

「ほゝゝゝない同士で、お互だから雙方、差引けば恨みツこなし、ねエ稻田さん」

「流石の稲田一作、いよく百計こゝに盡きて進退こゝに谷り、そのまゝ無言に築地
の人なき夜途を歩みしが、わざと京橋の大通街に出でて新橋方面より馳せ来る電車を
待ち受け、よろめく脚下を踏み占めながら、後も見返らぬ不意の飛び乗り、あはや乗
り損ねて大道へ抛け出されざりしは間一髪の僥倖なり、

かくと見るや否、もとより覺悟の小常、そこに客待せる辻俵を振り返りぬ、

「神田の錦町まで、幾何でも上げますから急いで下さい」

酔ひながらも心の素早い稲田一作、不意に小常を出し抜いて電車へ飛び乗り、まづ自己の本陣を固め城内を閉ぢて敵に踏み込まれぬ計略、それと覺悟の小常、また一作を見返りもせず辻俤に飛び乗り、まづ機先を制して敵の空虚へ斬り入る計略、いづれが先になるやら後れるやら、

早けれど電車に處々の停留場ありて、加之も運わるき時は立往生の恐れあり、遅けれど辻俤は間斷なく走つて、加之も賃錢數倍の勢力あり、實は神田錦町の下宿屋まで電車と辻俤の競走、つまり一作と小常と意地の張合、さりとして喧嘩でもなく、仇敵でもなく、内々そつと人知れぬ心の底を探れば互に腹の立つほど憎くもない事、聊か馬鹿けて兒戯に類すれど、犬の交尾期に等しき當世風の出合頭に出来る戀よりは面白し、生憎、電車は溢るゝばかりの満員、人間は歳暮の鮭の如く吊皮にブラ下りて前後左右より押さるゝ苦しさ、まして食ひ過ぎと飲み過ぎの一作、よろゝと思はず人の足を

踏んで劍突を戴き、紛々たる酒氣に車掌の御注意を蒙りながら、やうく面を皺めて須田町の乗替前まで來かゝりし時、忽ち停電、

辻俤の小常は斜めに近道を馳せぬけて、幾何でも上げますよといふ金の勢ひに車夫の韋駄犬、兼てお歌に聞き及ぶ神田錦町の下宿屋、その門口へ楯棒を卸させ、巾着より七八十錢の銀貨を後ろ手に差出しながら、すつと入りぬ、

「あのウ稻田さん、まだですか、途中で今お約束して來たんですから暫時、待たして貰ひませう」

下宿屋の主人も下女も案外の體、あの人にと思はず不審の眉を顰めながら、どうしても素人でない女振に損の行かぬ客と見て取りし俄の愛敬、

「いや、まだ御歸客は御坐いませんが、兎も角、お二階へ、これ、誰か稻田さんの部屋へ御案内申しな」

下女に引かれて二階の梯子段を左へ折れし突き當りの一室、障子を開けて捻り出す五燭の電燈うす闇き六疊敷に、一閑張の机と必要の文具と取散らしたる新聞の外さらに何物もない淋しさ、もしこれで一箇月の先拂ひせねば三日の籠城も覺束ない體、されど客を見て取つて俄に茶を出すやら菓子を出すやら座蒲團まで特別の待遇、

「さういふ御約束があれば、もう貴女、すぐで御坐いますよ、ほゝゝゝ」

何の意味で笑ひしか、牡丹餅を押し潰したやうな下女の笑顔に、小常は五圓と二圓を二包みにして差出しぬ、

「これはね、お茶代ですよ、これは汝さん、嘸お世話でせうねエ、あゝいふ我まゝな人だから」

はや既に敵の士卒を擒にせし小常、いよく本城に坐り込んで片頬の笑渦を浮べながら、今や遅しと待ち受けぬ、

運悪く途中の停電と須田町の乗替に二臺の満員、やうく三臺目に運ばれて歸りし一作、なほ酒氣紛々たり、

それと見るや否、二圓の鼻薬に目を光らして待ち受けし下女は二階へ注進、五圓の茶代に主人が飛び出しての笑顔、

「お歸宿なさいまし、先刻から貴君お客様が」

「何、客」

「途中で、お約束を遊ばしたとか仰しやいまして、御婦人の方が、へゝゝゝお待兼で御坐います」

や、しまつた、首尾よく出し抜いたと思ひの外、逆寄せに出し抜かれて本陣を乗ツ取られし一作、今更ら下宿屋の主人に向うて文句もいはれず、そのまゝ無言の足音荒く二階へ昇れば、今しも注進の役目を済まして出合頭の下女、ろくでもない面に愛敬を

浮べながらの小聲、

「おや稲田さん、お客様にお心付を戴きましたから、どうか貴君から宜しく、しかし貴君から戴く分は別で御坐いませうね、ほ、ほ、ほ」

いよく敗軍、もはや味方も敵に内通せりと思へど、まだ兜を脱がぬ一作、障子を開けて身を入れながら坐しませず、懐手のまゝ六疊の中央に仁王立、

「おい、大抵にしろ、ふざけるにも程度のおつたもんだ、實際この乃公が困るよ、ここまで困らせりやアもう宜からう、夜の十時は過ぎたぜ」

さらぬも捨鉢の小常、かうなれば女の一念、ますます自棄氣味に坐り込んで電燈の光輝に猶更ら眞白き雪の額越、じろりと一作を見上げぬ、

「稲田さん、どう考へても妾、氣が變になつてるやうですワ」

「無論、正氣でなさうだから今のうち養生しろ、この上また重くなると不可ない、

どうだ、送ッてやらうか」

「どいへ」

「汝の家へさ」

「妾、もう家がないんですよ」

「家がない」

「ありません」

「どうして、ない」

「捨て、仕舞ツたの」

「捨てたア」

「なまじツか面倒臭い、あんな家があるから、歸れの、送ッてやらうのと、いはれるンでせう、もし無ければ、いくら氣強い邪慳な貴君でも、まさかね、元は他人でも

なしさ、どうかして下さるでせう」
 「どうかしてやらない、出来ない、乃公は邪慳だ、薄情だ」
 「あら、まア、さうですか、ぢやアお世話にもならず妾は妾で、當分こゝへ下宿しますよ」

三年以前の稲田一作と小常、三年以後の今こゝに相見ずば、いかに互の心と心は絶えず忘れず思ひ思はるゝとも、うき世の風に吹き分けられ運命に割かれ境遇に隔てられて、そのまゝ過ぎし一場の夢となるべきに、なまなか縁あつて再び相見しがため、いと猶更ら昔を偲ぶ情に驅られ戀に募りぬ、
 加之も一作は前途に希望を抱いて眼前の戀と情を犠牲に供すれど、小常は眼前の戀と情に狂うて前途の我身を犠牲に供しぬ、供するよりは寧ろ抛け出しぬ、

今までは他人の所有物になりしといふ、妾の一字を楯として防ぎしが、もはや其妾宅を捨て、誰に遠慮もない獨身を當分こゝへ下宿するといふ捨鉢の自棄に出られて流石の一作も俄の狼狽、いよく眞面目に本氣の沙汰、例の大口あいて刻むが如く笑ふ自家獨得の無頓着では濟まさされぬ場合となりぬ、
 まして小常のために悪辣なる參謀官お歌の方、これが世間普通の妾でなく、元來の俠に好奇心を加味して加之も飽くまで意地の張った女、じつと其まゝ築地の我家に居られず、今夜の戦況を氣にして俾を飛ばしながら、丸鬚の根が落ちるまで勢ひ込んで襲ひ來りぬ、
 たゞ一人の小常でさへ防ぎ兼ねて難戦苦闘の一作、今また敵の新手に飛び込まれて前後の挾撃、ますます隙間もなく激烈に攻め立てられ、いよく窮して進退こゝに谷りぬ、

「や、どうしても乃公は無効だ、今更ら弱い音を吐くやうだが、この稻田一作は逆も無事に世の中を歩けない自然の運命に出来てゐるわい、社會を敵に取つての人事一切いかなる不幸も艱難も災禍も寧ろ面白く愉快に踏み破つて進むだけの自信力と自覺心は、確實に持つてゐる乃公だがね、儲この女といふ怖ろしい魔物に出喰はしちやア殆ど閉口だ、女も女、白日晴天の下に眞正面より戦つて直ぐ勝敗の決せる女なら宜いが、實ア薄闇い中から嫌な罪を背負つて來てさ、その罪の割前を食はされる女だからなア、思召より握飯だ、もし萬一この乃公を何とか思つてくれる氣がありやアかういふ有難迷惑の底に捻ぢ込むより、どうだい、二人で金の五六百兩も工面してくれないか、さし當つて仕事もないが兎も角その金で暫く女難除かたぐ、朝鮮か滿洲方面へ遊びに出掛けたいよ、しかし先方で再度、君等のやうな女に出喰はさないとともに限らない乃公だから、其時こそは潔く自殺する覺悟だ、つまり乃公は女に責め

殺されるべく出来てるんだなア」
 は、ととととと笑はぬだけが聊か平生より窮せし證據、されど泣いても窮しても一種どこやらに暢氣な男なり、
 「冗談は儲置いて今夜といふ今夜こそ實際まるつたよ、神算鬼謀の種切、平常の智慧も謀略も今は用ふるところなし、腹背ともに敵を受けて刀は折れ矢は盡きし湊川の楠公だ、残念ながら討死するより外アないね」
 お歌こゝぞと微笑を含んで、右より小膝を進めぬ、
 「稻田さん、ちよいと待つて下さい、さう貴君、短氣に討死して仕舞つちやア困りますよ、第一また死骸の後始末が面倒ですから、せめて息のあるうち兜を脱いで降参なさい、實は殺さないで生捕にしたいんですよ」
 小常は眞面目に左より詰め寄りぬ、

「何この強情な人が、おとなしく兎を脱いで降参するモンですか、まして討死、よく言へた事、嘘ですよ、憎らしい、つまり妾等二人を誤魔化さうと思つて、平生にない、さも困つたらしい顔を見せるんだよ、もし眞實、討死する氣なら、いッそ討死させた方が宜いの、なまなか生きてると却つて妾、腹か立って、じれつたくつて、口惜しくつて、ならないんですから、稲田さん、死んで仕舞つて下さい」

稲田一作、ぱちりと目を開きぬ、

「ますく、いけない、いよく、估券が下つた、流石の乃公も、かうなつたところは實に價値のないもんだなア、幸ひに親も兄弟もないが、もしあれば泣くだらうよ、たとひ女ア醜くつても清淨無垢の處女でさ、加之も正當なる理由の下に結婚を申込まれるといふなら兎も角、考へて見ると、いくら物質は美くつても、さシざ他人の御用に立つた玩弄物だ、いや現在まだ忙がしい御用中の玩弄物だ、その君等二人のた

め、どうだい、生かして置くの、殺して仕舞へのと、は、は、は、まるで野原から掴んで来た蟲けらの取扱ひを蒙つてるんだからなア、これで乃公が目的を達しても他日の成功上、たしかに二割ぐらゐの瑾瑕になつてるよ、南瓜の當り年も時に取つては面白いがね、かう無遠慮に押強く當られちやア閉口だ、もう少し穩和に、やわくと當つて貰ひたいね、は、は、は、時に段々と夜が更けて來るぜ、遅くなるぞ、もう十時だらう、この下宿屋は十二時に戸を閉めて寝るからね、第一また電車も無くなるだらう、どうする、二女とも宿る心算か歸る心算か、歸れば送らう、宿れば雙方の所有主に使者を遣つて一應、乃公から答へて置かう」

二枚腰の一作、押されて體を弓狀に反りながら、ぐツと土俵際の劍が峰に踏み止まりぬ、

夜の十一時過ぎ、まだ電車もあり俥にも不自由のない身ながら、わざと神田の大通街を避けて淋しき横町を歩み行く小常とお歌の二女、

「ねエ常ちやん、いかな稻田さんも今夜こそ、いよくまるッたらしいよ、あれまで手強く斬り込んで置けば大丈夫、もう確實だよ、根が腹の立つ事もないんだからねエ」

「でせうか、妾、まだ不安心な個處があつてよ」

「お察し申しますよ、惜しい事ねエ、折角あすこまで手詰の談判して、宿れなかつたのが不安心だらう、ほ、ほ、ほ」

「あら、嫌な、まさか」

「だつて、何故さうだらう、いちくさう弱く出るから不可ないよ、誰でも惚れた弱身といふ事はあるが、あまり此方が下手になり過ぎると、先方を疑るばかりで窮極

のないもんだよ、もう大抵な邊で此方から極めて掛るのさ、しかし考へて見ると女は馬鹿に出来てるよねエ、お互に何一個、不自由のない身で、家に居れば御飯の箸も重い氣のする妾等二女が、わざく下宿屋住居の男一人のため神田から築地くだりまで、加之も翌日の日が無いぢやアないし、たゞ話しながら歸りたいため、この夜露に打たれて俥にも乗らず、よく歩けるワねエ、ほ、ほ、ほ」

「眞實よ、さう思へば思ふほど猶更ら憎くツて、口惜しくツて、じれツたい人だよ、男早天もしない世の中に、あのまアぶツきら坊な無愛敬な口の悪い人に全體、どこが好くツて、かうなるんだらう、不思議だね」

「あら、常ちやん酷いね、そりやア妾の方から言ふことだよ」

「ほ、ほ、ほすみません」

「すみませんも、ないもんだ、おせツかいで、好奇心で、かういふ氣紛れに生れた妾

だから、自分の情夫でも戀でもない事に飛び出して狂女の眞似はするもの、たのまれた義理や人情で出来ない藝だよ、その代り妾の方にも亦いつ何時、どんな無理な注文を出すかも知れないから、其時こそ常ちやん、あたり觸りのない恰慟ぶつた尋常の謝絶やうでは承知しないよ、宜いかね」

「御念には及びませんよ、ほ、ほ、ほ、だが無理な注文も注文に依りけりで、まさか一旦、妾の所有になつた上あの人を譲つてくれといふんぢやア無いでせうね、それだけ妾、どうしても嫌だよ、前以て御謝絶して置きたいの、あまり親切に深い御世話を受けるゝと氣味が悪くつて、何だか危険でならないワ、ほ、ほ、ほ、」

「おや、また溶け出したね、でれくと見苦しい、往來だよ」

「家か往來か妾、分らなくなつて來たワ」

「うるさいねエ、満足に目を開いてお歩きよ」

「もう目が見えないんだもの」

稲田一作、もし世間普通の弱蟲ならば逆も無事では濟まぬ敵手、うかくすれば無理心中を仕掛けらるべき新聞の三面種なり、

現在その場の事實を目撃せし證據人が飛び出しても、これが二人の女に攻め立てられし前夜の色男とは見えぬ一作、今朝また例の如く七時半に神田の下宿屋を出でて相變らず用もない關東銀行へ八時の出勤

どう見ても女難に逢ふべき面でなく、いかにしても銀行員となるべき格でなく、もし女に關する事あれば強姦沙汰でも立てらるべき男振、もし銀行に關する事あれば株主騒動の壯士に備はるべき容貌、その稲田一作が情ある女に口説かれて動かす用のない銀行に出でて怠らず、あくまで平氣に澄まし込む心中、あくまで眞面目の胸中、何物

をか包蔵せる、

もとより行員でなく事務を執るでなく、第一また自己の坐席もない一作、ぬツと其まゝ、應接所へ入りて待てば、受附も小使も不審の眉を顰めながら、さて一月あまり一日も

缺かさぬのみか、頭取の木村周藏また必ず出でて逢ひぬ、
今日も例に依つて例の如く應接所に二人の姿、一作まづ満面の微笑を浮べて紋切形の口上、

「何か御用は御坐いませんか」

「左様、別段、これといふ用もありませんな、はゝゝゝ」

「此方から強ひて御催促の出来ない事ですが、お約束した二月も既に半を過ぎましたから、この邊で何か一事、相應の御用を承りたいもんですな、間斷なき御繁忙の中で、この無用物に毎日々々、たとひ十分でも二十分でも、よく御閑暇を潰せます

ね、平均一日に十五分宛としても一月に七時間の餘だ、時これ金を現實に證明せらるゝ貴君の七八時間は、たゞ爲す事もなく遊んでる奴の二三年に當るでせう、つまり一作は盜賊に來る理由ですなア、はツはツはツ」

「いや、稻田さん御心配に及ばない、銀行は無利息の金を扱ひませんよ、不肖ながら其銀行の頭取をする阿爺だ、たゞは盜まれない覺悟です、いづれ貴君の盜んだだけは利を附して必ず回収します、或は事に依ると稻田さん、案外の高利を取りますぜ、はゝゝゝ」

「案外の高利、こりやア面白い、その高利を取られて平氣に拂ふだけの人間になりた

いもんですなア」
「なアに、貴君なら、きツと拂へるだらう、もし拂ひ兼ねるとしても、差押へる物件は貴君の頭腦の中にある筈です」

「ますく面白、その期限は全體、いつごろです」

「もう長くはない、いづれ近日あらためて御通知するが、時に稻田さん、毎日、下宿屋で何をして居なさる」

「毎朝こゝへ御用を伺ひに来る外、目下これといふ仕事もありませんから、たゞ惘然として居ります」

「ほんやり」

「惘然にも種々、惘然の仕方はありますが、私の惘然は多年の經驗上より得て来た惘然で、實は大に誇るべき惘然です」

「はゝア、どういふ惘然です」

「つまり稻田一作も二三年前までは頭腦單純、味噌も糞も同じ流義で、學校の講義録と世の中の實際上に於ける差別が更に分りませんから、たゞ勉強とか、奮發とか

熱心とかいふ強迫的の意味を含んだ文字のために押へ付けられて、その態度は囚人の苦役に服する如く、その頭腦は時計の針の間斷なきが如く、眼前の馬鹿正直に忙殺されて日夜の恐怖心に驅られ、あけても暮れても戦々兢兢々として世間の事々物々に追ひ廻されて来たモンです、ところで學校の生徒たる時代は勉強さへすれば、免狀も取れるし卒業も出来るが、さて世の中へ出て見ると、目的が卒業證書でなく相手が教員ばかりでないから、さう一直線に簡單なルールは敷いてない、崎嶇羊腸、曲折波瀾、や、實に丸裸で荆棘の中を這って行くやうだ、とても勉強とか熱心とかいふやうな誰にでも力めて出来る藝當では無効です、否、寧ろ過度の勉強は自殺の階段で、ますく自己の方向を危くする、過度の熱心は狂氣の源因で、いよく自己を本領を没却する、つまり丸裸で荆棘の中へ慌て、飛び込めば、とんでもない怪我をする、また無理に這ひ込めば後へも前へも動けなくなる、そこで稻田一作、人

生の秘訣この惘然にありと考へましたね、惘然とは世間普通の所謂狐に魅惑され
たやうな、惘然でない、いはゞ物に當り事に觸れて脳味噌に熱度を持たせない工夫
です、いかなる難事に處しても五體の血管を沸騰させない習慣です、これを淺く評
すると氣脱のした無神経のやうですが、これを深く用ひて修養すると冷靜なる大膽
に通ひます、現在、かうして毎日々々、用もない銀行へ時間も違へず歩を運んで、
珍らしくもない貴君の顔を馬鹿々々しく拜みに來るのも、實は惘然の修行を得んが
ため、相場師の素丁稚に等しい今日の神経過敏なる青年輩が一日も辛抱の出來る
事ぢやアありませんまい、加之も木村さん、この惘然は自己の頭腦に對する一の養生
法で、自己の力量に對する一の蓄積法ですから、ちよいくと常に絶えず智慧や工
夫の小出しをして氣が利いてるとか間に合つてるとかいふ人間で、もし及ばない叶
はない成功しないといふところがあれば、試みに一度この惘然を使つて御覽なさ

い、は、は、は、

「なるほど、いや、なか／＼面白い、今日これから人に用ひられようとする人間が、そ
の相手に向うて勉強とか熱心とかいふものを賣物にせず、寧ろ意外に惘然の看板を
掛けたところ實に面白い、加之も徒らに奇を好むでなくその惘然に確實な理想と秩
序が立ッてるから猶更ら面白い、いづれ近日あらためて事實上、その惘然の手際を
拜見しませう」

「はッはッはッ、つまり世の中は一方に多數決といふ勢力はありますが、また一方に
類の少いといふ點が即ち反動的の價値を生じますから、今日のやうに猫も杓子も油
斷なく伶俐に飛び廻つて、到るところ學者と才子で鼻を突く時世には、自然の數理
上、どうしても調子外れの馬鹿が面白く珍重される理由になりますよ、實は一作の
惘然また其流で、案外お使用になつて惘然の機能がなにかも知れませんが、まア兎

も角も一應お試しになつて御覽なさい」

「は、は、は、時に稲田さん、貴君は金といふものを、どう見て居なさる」

「金、いはゆる富ですね」

「さやう、黄金力です」

「その富を自分が得ようとするに就いての意見ですか、但し富といふものを他から見
ての評論ですか」

「いや、自分の金に就いてです」

「社會に於ける富とか他人に對する富に就いては随分、議論もあり意見もあり、及ば
ずながら常に絶えず多大の注意を拂つて居りますが、なアに自分一個の金といふ事
に就いては主義も糸瓜もない、全然その範圍を脱して埒の外に居りますから、殆ど
零です、黄金これ瓦礫に等しといふ當世に流行らない古臭い腐れ儒者の説を、今も

猶この一作は新らしく神妙に固く守つて居りますよ」

「は、ア稲田さん、貴君に金の必要はありませんか」

「生憎、ありませんな」

「はてね、どうして生活の道を立てます、いかにしてパンを得ます」

「木村さん、ちよいと待つて下さい、生活に就いての費用ですか、パンの問題ですか、
は、は、いや、それなら別論だ、わざ／＼話を設けて富とか金とかいふ部には入れ
て居ませんよ、稲田一作も生理的の動物ですから食はずには生きて居れない、然し
衣食住は殊更に談ずるの要なく、そいつア既に人間といふ名稱の中に含まれて居り
ますからなア、は、は、は、生活を云々するは生活の程度論で、たゞ食つて生きてる人
類の生存を誇りとして自慢するやうぢやア實に世の中が心細い、とても社會の進歩
は望まれませんね、遠き我々の原始時代は知らず、今日の人間が木村さん、當然で

すよ、食はず飲まずの丸裸で一日も居れますかね」
 「なるほど、丸裸では稻田さん、居られんモンですかね」
 「や、失禮、また明日、あらためて伺ひます、はッはッはッ」

經濟界の一部に多少の重量ありて、中流以上を占めし關東銀行の頭取木村周藏、定めて其部下に勉強家といはれ謹直家と呼ばれ熱心家と稱せらるゝ奴は腐るほどあるべし、餅屋に餅の進物は面白からずと實は當座の團子細工に出來合の品ながら、不意に味の違つた惘然説を喰はして敵の案外に組み付きし一作、なか／＼油斷のならぬ男なり、加之も現實に免れ難き生活問題を以て向はれし時、これを手軽く人間といふ名稱中に含ませて論にも齒にも掛けず、巧みに敵の鋒鋒を避けながら、わざと丸裸の一語に窮して其まゝ飛び出せし愛敬、とても實際の惘然では出來ぬ藝なり、

關東銀行を立ち出でし一作、おもはず振り返りて鼻頭と肩口に七分の冷かなる笑を浮べながら、このまゝ、神田の下宿へ歸るも身に用なく、語るに友なく食ふに美味しいものなし、幸ひ昨夜の今朝、いかにせしか、何とするか、いづれ近日また盛り返して襲ひ來る二女の奴等に此方より逆寄せの一興、聊か罪の深い業なれど、いまだ用意の整はぬ陣中へ唐突の不意打を掛けてくれんと料簡、いよく以て此奴、けしからん男なり、

築地の妾宅、お歌の本城、ぬツと無遠慮に踏み込んで例の大聲、

「お在宅かね、稻田だ」

聲と共に出迎へし下女、不出來の額越に一作を見上げて、又かと蒼蠅さけの口吻、

「お不在で御坐います」

「ふん、不在かい」

「いつにない今朝、お早く」

「どこへ出かけた」

「存じません」

「いつごろ歸るとも聞かないか」

「お申置は御坐いません」

「さうか、ぢやア仕方がない、まさか不在に居坐り込んで下女の汝なにかを相手にしても居れまいよ、は、は、は、は、實は何も別に用はないんだ、時に汝、なかく、忠義ぶツて働くやうだが全體どこの生産だ、過日、酔ッ拂ッて歸る歸さないと争ッた時、乃公の下駄を盗んで遁けた工合は敏捷かつたね、臨機應變、當意即妙、感心したよ、乃公も家を持てば汝のやうな下女を置きたい、給金は幾何だ」

「下女といふものは忙がしう御坐いますから、盆と正月に閑暇のある時、また伺ひませう」

「下女といふものは宜かつたね、盆と正月は猶更ら振ッてる、その一語、正に他日の亭主を尻に敷くだけの力が十分あるよ、は、は、は」

ぶツと膨れじ下女の面を見返りもせず、そのまゝ飄然と立出でしが、これほど暢氣な横着物ながら、流石に横町の小常が妾宅へ踏み込んで明治の與三式を演ずるほどの勇氣もなく俗氣もなく、ちらと其門口を覗くだけの稚氣もない男、銀座街頭に出でて一時間の餘も散歩せし後、電車に運ばれて神田の下宿へ歸れば、一個の面を半分づつに使ひ分の主人、いよく訝かしけの眉を顰めて溢るゝばかりの微笑を浮べぬ、

「稻田さん、お客様が見えました」

「や、またかい」

「いえ、もう、先刻お歸去になりましたが前夜の、お客様です、へ、へ、へお止め申し」

たんですが今日、外に用があるから明日の夜、ゆっくり来ると仰しやいましてね」
 「うかく、止めてくれちやア困るよ、また明日の夜、ゆっくり来られて堪るかね、し
 かし二女で来たかね」

「お一人で」

「どツちだ、丸髷か束髪か」

「丸髷の方で、そして稻田さん、重ねぐ、恐れ入りますよ、昨晚は束髪の方に戴いて
 今日また丸髷の方に、お心付を頂戴いたしました、へ、へ、ちよいと入らしツても
 流石に違ツたもんで御坐いますな、これまで随分、お謝絶の出来ない妙な關係から
 内々で怪しい女學生の宿り込みも見ない振を致しましたが、いやはや、今日の
 方なにかに比べると、まるでお話になツちやア居ませんよ、へ、へ、へ」
 うるさけに半を聞き残して其まゝ二階の我室に入れば、一閑張の机の上に箱詰の名物

鮓、包みし上紙の端に鉛筆の走り書、

おひるのまにあへば、うれしく存じ候、あすのばん、うかゞひ申し候、

う た

いなださま

本人に來られては蒼蠅けれど、好物の置去は有難し、まさかに毒の仕込である筈は
 なしと折しも幸ひの午飯前、上包を引破りて箱の蓋を開けながら、まづ二個三個、抓
 んで口に押込むや否、茶盆に箸を載せて運び来る下女、

「おや、稻田さん、貴君もう召上ツて在らツしやるの、まアお早い事」

「早くても遅くても、どうせ食ふもんだ、なアに箸は入らない、茶は宜いが鮓に箸は
 入らないよ」

「だツて稻田さん、あまり勿體ないぢやアありませんか」

「何、勿體ない」

「かうして、わざとこゝまで持つて来て下すつた方の御芳志に對して、さう貴君、むしやくと手摺みに、少しの間は冥加のため、じつと眺めて在らっしゃいよ、全體あゝいふ方が貴君へ、どうも妾、不思議でなりませんわ」

「ふざけるな此奴、洋犬の藝ぢやアなし、腹の減つた人間が食物を眼前に置いて辛抱出来るかい」

をりしも階下より唐突に叫ぶ聲、

「稻田さん、お客様、先刻の方が御來車になりましたよ」

明日の夜、ゆつくり来る筈のお歌、敵の油断を見澄まして今こゝに取つて返せし不意の襲撃、加之も無遠慮に入り来りぬ、

「稻田さん、昨夜は失禮」

猿の如く口に頬張りし一作、目を剥きながら振り返りぬ、

「昨夜は失禮ぐらゐの手軽い挨拶ぢやア濟まないぜ、實に困つたよ、あゝいふ狂女だもの一人で澤山なところへ、わざと後から加勢に来るのは酷いね、いくら何でも少しは察して貰ひたい、こゝは稻田一作いまだ池中の物たる下宿屋の境涯だ、第一また今日は見逃してくれて明日の夜、ゆつくり攻めに來る筈ぢやアないか」

「ほゝゝゝ明日の夜、ゆつくり來るといへば、きつと御不在になる貴君でせう、だから今日、わざと貴君の好きな食物で油断さして置いて、不意討を掛けましたの、ほゝゝゝ案の定、かゝりましたねエ」

「ますく、酷い、あまり残酷だ、人を食物で釣つて置いて鼠か何かのやうに案の定、かゝりましたに至つちやア殆ど人間待遇でないね、しかし食つた以上お禮はお禮だ、有難う、この鮓は實に美味い、流石に名物だよ」